UFOと宇宙哲学の研究誌

コズミック ニューズレター

NO. 44

日本GAP

コズミック・ニューズレター
第44号目次

なぜ彼らは来るのか（3）　フレッド・ステックリング　1
トピックス　12
二つのコンタクト事件　13
質疑応答　15
<新訳>空飛ぶ円盤実見記　ジョージ・アダムスキー　19
昭和45年度日本GAP総会、開催　30

＊表紙<写真>は斎藤雄久君撮影の円盤．昭和45年9月下旬夕刻5時前頃、自宅ななめ前の2階屋の屋根すれすれに超小型UFOが突然出現．約5秒位滞空状態で上下ジグザグ運動を行ない、やがて南西に向かう瞬間をキャッチしたもの．円盤は5機編隊であった．　<データ>カメラ＝ミノルタSR—1．F1.8に3倍テレズーム追加．シャッター1/500．絞り1.8．赤色フィルター使用．これは映画の1コマではなく、普通のスチル写真である．

巻頭言

近来一般人のUFOに対する関心度が極端に低下してきたが、これは世界的傾向である。その原因としては、アポロ計画の結果やその他一連のロケット打上げ等により、他の惑星における人類生存の可能性が否定されたかの如き印象を与えたこと、米空軍がコンドン委員会の調査報告に基づいて円盤の存在を公式に否定した事等が考えられるのである。加うるにテレビ等によるデタラメな円盤映画の放映によりUFOに関して一般大衆にきわめてゆがめられたイメージを植えつけている。しかるに世界各地では依然として円盤は出現しつつあり、写真に撮影されているのである。結局、米政府は大衆を欺瞞しているのか、それとも社会的大混乱発生の防止策を講じているのか我等には不明であるが、善意に解釈して後者をとりたい。何となれば大衆が自己保全のために恐怖心の権化となっていることは日常生活のあらゆる面からみて明白であり、そのゆえにこそ我等自らこの惑星上に巨大なカセを作り上げて自縄自縛の地獄を形成しているからである。

ここにおいて我等はジョージ・アダムスキーの偉大さを更めて認識せざるを得ない。彼はすでに「空飛ぶ円盤実見記」（一九五三年刊）において自由エネルギーの解明の重要性と共に、それが地球の経済に及ぼす大影響を余見して、円盤・宇宙人問題の発展の困難さを予知しているからである。だが緩慢ながらも世界は着実に進歩してゆく。早晩大国は欺き通すことが不可能となるだろう。〝真実〟は常に勝つのだ。我等は焦るまい。大地に足をしっかりつけて眼は天空を凝視しつつ宇宙的な視野を拡大してゆくことにしよう。この世界の慣習を守り、一般人と努めて調和を保ちながらも地球的な狭量なセンスマインドには同調すまい。如何なる困難にも屈することなく微笑を浮かべて前進しよう。他人に対しては驚くべき親切さを発揮して神の子の面目を保とうではないか！我等を狂気のヤカラとあざける者はだれぞ！　自己保全のために真実を欺く者こそ狂気ではないか！　いや、言うな言うな、黙って旗を振りかざせ。あの〝宇宙の意識〟と印された旗を！

なぜ彼らは来るのか (3)

フレッド・ステックリング

第四章　自由な誕生

われわれはだれしも自由でありたいと思う。自由に生まれたいと思う。これは人間の心中に存在する最も強烈な願いである。われわれは人間としての束縛、肉体と心の病気、恐怖や嫉妬、迷信や神秘などからのがれたいと思う。この目標を達成して夢を実現させるためには、無数の変化をなしとげる必要があることに気づかねばならない。

われわれが知らねばならないのは、〝完全な人体〟の作り方、母体の妊娠期間中に正しく子をはらんでそれを持続させる方法、宇宙的または自然の原理にそった子供の育て方等である。同胞に対する宇宙的な無私の愛、創造主との真の関係等を教えるためには、常に生命を尊重し、慈悲をもって研究し奉仕しなければならない。

この章で述べられる知識は金星と土星の人々からアダムスキー氏を通じてわれわれに与えられたものである。この両惑星はこの太陽系内で社会的にも科学的にも最も高度な発達をとげた社会を築いている。この人々は〝自然〟とそのバランスのとれた存在状態を研究することによって、われわれには殆ど理解できないような域にまで進歩している。彼らは宇宙の〝生命の息〟が等しく各生命体を支えていて、そのために各生命体は生長することができ、すべての他の創造物に奉仕できるのであることを知っている。彼らは〝自然〟とは神自身の法則の働きであり、神の指導のもとに完全に整合して動いているという結論に達しているのである。

彼らは創造主すなわち神は〝人間〟として眼に見えるものではなく、また神を研究して理解する唯一の方法は神の創造物を通じて可能であることを知っている。神は〝自然〟の中に現われている。なぜなら〝自然〟は神の至上なる英知の具体化であるからである。

彼らにとってはあらゆる人類は皮膚の色や信条の如何にかかわらずみな等しいのである。彼らは存在するものすべては〝宇宙の息〟の現われであり、その息が個別化された形あるものに生命とエネルギーを与えていて、形あるものすべては自己が創造された目的を遂行していることをよく理解しているのである。

地球という母なる自然は、地上の多くの生命体を創造するのに必要な材料のすべてを供給する。そして創造の活動すべては〝至上なる英知〟によって導かれており、その英知は諸原理のもとにあって永久不変である。

イエスは創造の究極の信念を含むカラシ種のことを話した。彼は言う。もしわれわれがこの種の信念を発達させることができれば山をも動かせると。

両親としてのわれわれは魂が安住するための肉体すなわち宿を作り出す特権を与えられている。われわれはみな子孫を作り出す特権を与えられており、妊娠期間中やその後もすべての事がうまくゆくことを願い、神すなわち自然が完全な人体を生み出すためにあらゆる物事の世話をしてくれるように願うことができる。しかるにわれ

われはこのすばらしい創造の過程において〝自然〟の御手にゆだねようとしているだろうか？またわれわれは正しい方法で仕事にとりかかるために〝自然〟から受ける印象に耳をかたむけようとしているだろうか！　殆どそうしてはいない！　もしそうしていれば完全に健康な両親が不具の子供を生んだり、完全に知的な両親が知能の遅れた子供を生んだりはしないだろう。すると妊娠期間中の処理の仕方に何かが誤っているにちがいない。―出生後の幼児の正しい保護についてはいわずもがなである。ここで再び〝自然〟に返ることにしよう。私は不完全な人体が出生する例を二つほどあげたいと思う。たとえばニワトリは孵化されることになると常に巣の中に卵を生み、巣から数フィートも離れた所には生まない。しかし後者は人間の受精の際にまさしくやっていることである。というのは精子は〝巣〟すなわち子宮にむけてまかれないために、数時間みずから上昇の活動を続けなければならないからである。この間精子は多少の光と空気にさらされる。これだけでも精子は弱められて、最後には卵子と結合するにしても、創造の不完全な行為の第一段階が起こることになる。そして精子は大部分の力を失ってしまうのである。ニワトリの卵による実験の結果、科学者はこのことを立証している。孵卵器の中で科学者は卵を孵化させたが、それらの卵には大きい方の端に小さな穴をあけた。そして中味に空気と光をあてるようにした。卵はみなかえったが、新生のヒヨコは完全な姿ではなかった。正常なヒヨコにくらべてからだの均衡が著しく欠けていたのである。また病気にかかりやすく、大体に自然の状態でかえったヒヨコにくらべるとたいそう弱かったのである。

出生時の欠陥に関する問題に返ることにしよう。われわれは〝自然〟がみずからを健全なバランスのとれた状態であらわしていることを知っている。ゆえにわれわれはそれと同じようにやるべきである。そうすれば苦痛の多くは解消するだろう。人間の側に干渉がなければ〝自然〟がその思うとおりにやってくれるはずである。言いかえれば、男性も女性も受精行為の瞬間に完全に一体化した状態にならねばならない。すなわち無私の愛の一体化であり、最も聖なる創造の行為における両者の完全な合意を必要とするのである。なにびとといえども性関係を強制されてはならない。というのは、強制されるならば、された側の人が相手に対して否定的な状態にあり、それゆえに性行為と受精そのものに対して否定的になるからである。われわれは女性こそ健全な子供を生み出すのに重要な役割を演じることをみな知っている。ゆえに、特に女性は絶対に性行為を強制されてはならないし、自己の意志に反して妊娠してもならないのである。夫といえども強制する権利はない。特に夫婦関係においては他の場合よりも暴力的な性行為が多いのであるが、これは相手に対する所有権を行使しようとするのであろう。

男女共次のことに気づかねばならない。すなわちクライマックスの瞬間に巣の中へ正しく種子を〝まく〟ことが可能であれば、正しい受精が行なわれるという事実である。この瞬間に子宮は広く開いているので、精子は光や空気にさらされる必要はない。こうしてわれわれは完全な人体の創造における第一段階を終了したことになるのである。

相手に対する真の宇宙的な愛と理解をあらわすためには、われわれの仕事はこのようなきわめてデリケートなものでなければならぬ。調和した性関係は〝自然〟の中で最も聖なる最高の行為である。な

ぜなら性関係なくしてわれわれはこの世に出現できないからだ。最低の生物体から最高の生物体に至るまで何ものも存在できないだろう。創造主の最高の法則であるこれらの事にさからって生きようとする者は、さしあたり自分を愚か者にしているのである。セックスは神から人間への贈り物であり、それによって人間も創造の行為に参加できるのである。この法則が誤解されているばかりでなく誤用されているのはまことに残念である。実際、人々のなかにはセックスについて語ろうとしない者もいる。この人々にとってセックスはあまりに恥ずべきことであって語れないのだ。この世界には性行為に真に両親から望まれながら生まれてきた人はきわめて少ない。あらゆる妊娠の九十パーセントは偶然の結果である。しかも妊娠にはきわめて巧みに遂行される自然の原理が伴うのである。創造主の反映の最高のものとして、われわれ人間は〝自然〟が提供する物事の方へ立ち返らねばならない。人間が〝自然〟から恩恵を蒙ろうと思えば、である。（注＝以上はフリーセックスや乱交を奨励しているのではないから誤解なきようにお願いしたい）

このことは私にとって不完全な人体が生まれ出る第二の実例をもたらす。

われわれは都市の中でさえも或る種の園芸を楽しむ。そこで認めねばならないのは、われわれが草木、花、野菜等を同じように繁茂させようと思えば、そのように正しい計画を立てる必要があるということである。

まずわれわれは入手できる最上の土地を探す。その土地に充分に肥料を施し、次に種子に添付されている説明書をよく読んでから種子をまく。それから菜園に水をやり、芽が出てくるのを数週間も忍耐強く待ち続ける。そうだ、われわれは植物の完成の大部分の行為を〝自然〟にまかせるにしても、新しい生命を誕生させる仕事を手伝ったのである。妨害がありさえしなければ〝自然〟は植物を完成させるだろう。しかるにわれわれは同類の人間を作り出す場合、その〝種子〟を愛情をこめて世話をし、完全な人体になるように正しい方法にそって生長を助けようとして充分な努力と時間と忍耐とを用いようとしないことを知る必要がある。

妊娠期間中に多くの女性は医者の奨める養生法の反対をやっていることは事実である。ここにも人間が勝手な事をしようとする利己的な意志がある。

人間の心は食物を消化したり傷を治したり新生命を作り出したりする真の方法を知らないのに、人間のエゴは内部の〝創造的知性〟に対して常に反抗してきた。本書では右の各機能を〝自然の働き〟と呼んできたが、これを注意深く調べるならば人間の心が理解できないほどの英知を〝自然〟が現わしていることがわかるだろう。われわれが完全に健康な子供を望むならば〝自然〟の法則すなわち神の法則に従って行動しなければならないことを心に留める必要がある。人間が神の意志にゆだねるならば、神は常に人間と共に働く。しかし神が人間にかわってやってくれるのではない。ゆえに人間の怠惰や利己的なプライドなどは絶対に神によって支持されることはない。

人間の自由意志は神から与えられたが、これは神の至上なる英知に反抗するためではなく、宇宙の因を理解するためである。肉体とエゴの心を作り出しているのは、宇宙的なパタンに従っている宇宙の英知であることを忘れてはならない。このことが創造主の（宇宙

の）英知が人間のエゴの英知の上位にあることを立証する。

〝妊娠期間〟として知られる非常に重要な期間には、多くの責任が生じる。この世に完全に健康な人体が生まれるためには、その責任は両親に負わされねばならない。これを説明するのに再び菜園の話に返ることにしよう。これはだれにも容易に理解できるものである。

まいた種子が芽を出し始めるにつれてそれは特殊な世話を必要とする。しかし芽の上に大きな石をころがしたりしていためつければ、果たして完全に成長するだろうか？　否である。しかるにこれこそ性関係の受精作用時に人間の両親が〝種子〟に対して行なっていることなのである。なぜなら女性の肉体の興奮がまさしく〝種子〟をいためつけているからだ。

妊娠している女性は全く菜園にたとえてよい。そこではあらゆる種子を完全に成長させるために愛情ある世話を必要とする。以上のすべてを人々が受け入れるのは困難にちがいないことを私はよく知っている。われわれは過去においてそのように教えられたからだ。しかし、もちろん常に〝最初〟というものがなければならない。過去はわれわれにとって多くの価値ある事を実証しなかったからだ。歴史がこのことを示している。ではなぜわれわれは現在を直視しないのか？　現在にこそ文明の救済があるではないか。

自分に対して正直であることにしよう。一体、すでに妊娠してしまったあとでなおも妊娠期間中に性交を行なう動物について見たり聞いたりしたことがあるだろうか？　動物がそんなことをしないのを私は知っている。私はこの点について徹底的に動物の行為を研究したからである。動物は自分たちの種族の〝種子〟をいためたりしないのに人間はやっているのだ。それでも人間は動物を知能の低いものときめてしまっている。しかし動物は少なくともこの世に一匹の健康な子供を生み出しているのだ。動物は本能に従う。その本能が自然の表現の通路に彼らを導くのである。ゆえに動物界には流産や不具の誕生はきわめて少ないので、人間の出生に関する失敗と動物のそれとを比較しようとして比率を求めるのは不可能である。獣医や生物学者はみなこのことを知っている。

きわめてまれな機会に不具の子牛や子鹿が生まれることはある。しかし人間が干渉しなかったらこのような少数の例もなくなるだろう。もっとくわしく言うと、もし家畜が妊娠期間中に打たれたりショックを受けたり、ひどい仕事をさせられたりしなければ、不具の子供は生まれないだろう。

自然界で自由に生きている動物の場合でも人間は干渉する。妊娠している鹿が夜間自動車によってショックを受けることがある。多くの機会に人々は禁猟期のメスの動物を射っている。当然このような事は不完全な子供を生むことになる。

われわれが〝自然〟にさからわないでそれを尊重し、人種差別もしないで〝天の父〟をうやまいながらこの地球上で調和して生きるならば、今よりもっと地球は美しくなるだろう。わずか数年間で空気はきれいになり、産業や自動車による公害もなくなるだろう。河川や湖も有毒の化学物質におかされなくなるだろう。人間が常に留意しなければならないのは、人間がいなければこの惑星は美しい天国になるということである。

第五章　新生児の最初の印象

赤ん坊が物質の世界に誕生する。ついに最も困難な仕事が達成されたのである。人間の一生涯において出生の数時間ほどの悪戦苦闘はない。

幼児の幼い自然のままの心は清純で無垢である。この幼児が慈悲深い謙虚な高貴な人間となって、創造主の英知を現わそうとして利己的な考えなしに他人に奉仕するような人間に育てあげて指導をするのは、われわれの大きな責任である。

われわれが天国のような社会に生きたいならば、それを建設し始めねばならない。しかも早いほどよい。子供たちの指導者たるわれわれは自分の意志を子供に押しつけてはならない。所有感なしに子供を導いて世話をし、その個性や能力に干渉してはならない。

アダムスキー氏は次のように言った。「幼児が生まれたばかりの時は、その心は周囲の環境からあまり印象を受けていません。人体内の〝生気〟からフィーリング（復）を放射しています。人体の作り手、すなわち〝全包容的英知〟は自由な状態にあります。金星や土星の両親たちはこのことを知っていて、子供たちから多くを学んでいるのです」

ゆえに近隣の惑星の人々はイエスの語った次の言葉の意味をはるかによく理解していると思われる。「幼な子があなたを導くだろう」この言葉は二千年前に地上にもたらされたのだけれども、宇宙人は真にこれを理解してその言葉に従って生きているのである。幼児は恐怖を知らず、また嫌悪感を持たず、他人に対して差別をしないことをわれわれは体験から知っている。また幼児は憎悪や嫉妬心も持たない。ただおとなのわれわれがこんな不正な事を幼児に教えて、われわれの他人に対する差別状態を気づかしめているのである。

われわれが幼い者たちに生きることの価値を教え込むのが困難であることをスペースブラザーズはよく知っている。というのは、われわれの多くは生活を〝わずらわしい事〟とみなしているからである。われわれがこの地球上で日常生活のトラブルを直視できないで、もっと高度に進化した惑星へ行くことがどうしてできるだろう？たぶんわれわれが責任の果たせる両親になるためには、生活を少し宇宙的な理解と同胞愛の方向へ変えるとよいだろう。

他の惑星から来る友は幼児の心または他人の心を傷つけるようなことはしない。ところがわれわれは他人に対して好き嫌い、意見、尊大さを行使することによって、イエスの教えの基本的な法則そのものをおかしているのである。「自分がしてもらいたいと思う事をまず他人にせよ」地球の宗教界のリーダーたちにこの非常に困難な仕事に関してわれわれを大いに援助してもらいたいものである。

人々のなかには次のような弁解をする人がいるかもしれない。「子供にかまっている暇はないよ。金もうけに働かなくちゃならないんだー時は金なりでね！」金がわれわれにとってそれほど重要な意味があるのなら子供を持つべきではない。この世界では金が必要だが、それは二次的なものである。子供は指導者として両親を必要とするので、両親は一日の内でせめて数時間を子供と共にすごすようにするべきである。

〝全能のドル〟を追いかけることによって、この世界の多くの美しいものが殆ど失われている。なぜなら刻々を楽しみながら、そして生活自体が提供する物事を楽しみながら日々を生きていない人は生気のない愚か者にすぎないからである。

セオドール・ルーズベルトは次のように言った。「結局、唯物論

は人間の魂の純粋な性質のすべてを食いつくす」

われわれが子供をわずらわしいものとみなすほどになっているのならば、子供に対する責任を帯びていることをただちに思い出さねばならない。それは生活の他面よりもはるかに重大な責任である。この他面とは当然金と財産とを意味する。そうすると、どのようにしてわれわれは生活を尊重することを子供たちに教えたらよいか？子供が話したり理解したりできるようになったら、なるべく子供をつれて森、公園、野原などへ出かけるとよい。すると、さまざまのコン虫や小鳥や、それらが生かされている目的などを子供に見せてやるすばらしい機会がある。第一段階として、動物を苦しめたり殺したり小鳥の巣を破壊したりタマゴをこわしたりしないように強調する必要がある。自然界には目的なしに創造されたものはないからだ。それでもわれわれは或る種の小鳥や動物を人間に有用なものと分類する一方、役に立ちそうにない動物を勝手に殺しているのだ。

常に忘れてならないのは、新生児は面白半分な殺し方を知らないということである。われわれが子供に敵対行為を教えているのだ。このことは子供がまだ小さい頃から行なわれる。一匹のクモか小虫がカーペット上にいると、たちまち家族全体が大騒ぎをする。みんながそれに殺到してついには殺してしまい、眼には勝利の表情を浮かべる。多大の興味をもって両親を見つめている幼児にとって、このヒステリックな感情的行為に価値があるとあなたは信じているのか。

幼児がおとなの感情や好き嫌いに全く簡単に影響を受けやすい事実を認識せよとスペースブラザーズはくり返し強調している。この基礎の上に築かれた文明ならば決して絶滅することはない。

リーダーズ・ダイジェストの一九六六年十一月号に掲載された記事〝新生児の驚異の世界〟で、リリー博士は次のように述べている。

「新生児に対する伝達力はきわめて驚くべきものである。この力を理解し、それに応えようとして両親が努力するならば、幼児への伝達は全く可能である。幼児が視覚によって個人を見分け得るようになるよりずっと以前に、幼児は自分を抱いてくれる人たちの抱き方によって個々の人を識別しているのだ。自信のあるおだやかで親切な人に抱かれているか、それともイライラしている人に抱かれているかを幼児は完全に知っているのである」

これは感覚径路を通じて印象によってなされるのである。赤ん坊というものは本来新しい物事に接近するのに熱心で大胆である。両親またはおとなたちのベイビー・トーク（注＝赤ん坊口調の話し方。たとえば「さあさ、おちゅきなもの、あげまちょ」というような話し方）は無意味である。そんな話し方は幼児を惑わすことにもなりかねない。

研究によれば一才児は普通のオモチャについて知りたいと思うことなら何でも九十秒で理解できることがわかっている。ゆえに、おとなや両親は気をつけねばならない！　われわれはすべて子供の眼の中のキャンディッド・カメラに向かっているのだ。われわれがバランスのとれた感情、理解、互いの尊敬などを示せば、子供もそのようにしようとするのである。息子は父のようになると言われてきた。幼児は両親のガイダンスだけを利用する。ゆえにわれわれは子供を立派な人間になるように指導しなければならない。たとえば、三才児を子細に調べてみると、その両親がどのような精神状態にあ

るかを知るのは困難ではない。子供は両親の感情や習慣を正確に反映しているからである。

さて屋内のクモや小虫の問題に返ることにしよう。われわれがそれをつかまえて外へ逃がしてやるならば、それを見つめている子供は同じ態度を身につけるであろう。そのとき子供は生命を尊重する方法の第一段階を学ぶのである。

人間が同胞以外のあらゆる物に対する支配権を与えられたことは事実である。だから人間は動物を殺す権利を持っているのかもしれない。しかし人間は楽しみや嫌悪のゆえに殺す権利を持つのではない。人間が動物を殺す権利を持つのは食物にするためである。動物が醜悪な格好をしていたり人間にとって直接の価値がないからといって、人間に殺す権利はないのである。子供たちが虫をくわしく研究しようと思うような年令に達したならば、われわれは虫のとらえ方や、それをガラスのコップに入れて観察したあとは放して自由にしてやり、虫が創造された目的を遂行し続けるように仕向けてやる方法などを教えてやらねばならない。

子供たちにこんなふうに教えて、動物やコン虫に友好的になるようにさせるならば、子供の単純な心の中に小さな愛の種子と尊重感とを植えつけたことになるのである。そうすると将来はこの子供たちが学んだ事柄を次代の子供たちに伝えるだろう。—多くの創造の驚異に対する尊敬感を心中に保ちながら建設的なやり方で奉仕するために—。

第六章　幼児期の後期

私と息子とがバージニアの晩秋の森の中を歩いていた時に、息子が次のように尋ねたことがある。「お父さん、秋になって木の葉が散ったのだから、葉はもう死んでしまったの？」

「いや、散った葉は死んだといえるかもしれないが、人間は死というものについてたいそう誤った考え方をしているのだ。なぜって葉そのものの生命は永久に生きるのだからね。生命そのものは死ぬことはできない。そうでなければ生命とはいえないだろう。生命は永遠に続くんだ。生命とは神であるからだ。わたしの言う意味を見せてやろう」

二人は葉のすっかり落ちた一本の高い樹木の下の小道からはずれて歩いた。枝々が低くたれて容易に手がとどく。

私は一本の枝を引き寄せながら言った。「いいかい、古い葉が枝から離れると必ず新しい芽が現われる。実は枝から古い葉を押し出したのは新しい芽なんだ。古い葉の生命は死んだのではなく、新しい芽となって続き、翌年の春に顔を出す準備をしていることがこれでわかる。新しい芽が秋の始めに作られると樹液は古い葉の中に流れ込むのをやめて葉を茶色にしてしまう。すると芽が成長して、ついに古い葉はこれ以上もちこたえることができなくなる。そこで木から落ちて地面に横たわり、やがてくさってしまう。こんなふうにして森林は肥やされて、生命のメロディーはいつまでも続く。他の生物もこれと同じことなんだ。生命体はいつか死ぬかもしれない。それは目的を遂行したからだ。しかし生命エネルギーは別な同類の形態によってみずからを現わすつもりで生き続ける。というのは、生命体の創造は創造主によって造られた普遍的なパタンに従って決して中止されないからだ。われわれは生命と死についてたいそう考

え違いをしている。それは結果だけを探究するように教えられて、結果を生み出す原因を教えられないからだ」

息子は私の言った事を殆ど理解したことが私にわかった。彼はそれ以上質問しなかったからである。

人間が住んでいる寺院ーすなわち肉体ーの問題に返ることにしよう。人種別の如何にかかわらず子供に自信を持つことを教えるのは最重要である。宇宙の英知によって創造され維持されている肉体は魂の宿る場所にすぎない。人間は皮膚の色のゆえに自信喪失で苦しんではならない。皮膚の色は目的を持って作られたのである。だから自分の肉体に満足しなければ創造主を非難していることになるのだ。

万人が唯一の宇宙の創造主の反映であることを子供に教えなければならない。すぐれた者、劣る者の区別はなく、万人が同じ力と同じ能力ー生命を授けられている。われわれは自分の感覚を非難のためでなく奉仕のために用いねばならぬ。そのときにのみ、われわれは古き物にかわって良き物を導入する上で判断する権利を持つのである。

巧みに育てられた、謙虚な、慈悲深い子供の手の中にこそ、われわれの文明の未来が存在する。幼児の心は訓育するのが容易である。たぶんこのゆえにイエスは子供たちに話しかけることを好んだのだろう。「子供たちを私の所へ来させなさい」とイエスは言った。子供はオープンマインドを持ち、純粋であり、自由に教えを受け入れる。人間が良き社会を望むならば、子供たちがそのように教えられねばならないことをイエスは知っていたのだ。

私は国籍や皮膚の色の異なる子供たちが砂箱の中で互いに仲よく遊んでいるのを見たことがある。驚いたことには、この子供たちは共通の言語で意志伝達をするのに困難があるにもかかわらず、一般のおとなや国連その他の政府関係の場所にいる政治屋たちよりもはるかに仲よくしているのである。正直な気持で相手の眼を見つめることのできる子供たちを見るのは楽しいことである。

読者は言うかもしれない。「しかし一体どうすれば自分の子供が他人の影響を受けたり、戸外にいて破壊的な物事をおぼえたりするのを防げるか?」もちろんわれわれは偶然の出来事を防ぐことはできない。しかし子供たちがわれわれの指導を頼っているあいだは、彼らが宇宙的な理解の確固たる基礎を築くように手助けしてやることはできる。もしこの事が誕生の日から学校その他の場所で経験を持つために家を離れるようになるまで行なわれるならば、外部の影響が何であろうと子供たちは進むべき道を知るだろう。彼らは両親を信頼し、忠告を得ようとして難問をかかえて両親の所へやって来るだろう。しかし時間をさいて子供の質問を聞いてやるかどうかはわれわれにかかっている。聞いてやらなければ彼らは別な人の所へ行って解答を求めなければならなくなるだろう。

子供の受容的な心に決定的な影響を与えている別な重要事は、報復の動機に基づいて作られたテレビの劇画である。この事はまさにわれわれの鼻先で起こっているのだ。テレビ劇画を注意して調べてみると、子供たちに悪影響を及ぼすものが多いことに気づくだろう。劇画に出てくる人物が何であろうと問題ではない。ストーリーが殆ど報復または他人をあざむいたりする話を基礎にしているのである。

このことはかなり長いあいだ行なわれてきたので、われわれはもう笑う動機を殆ど見出せない。ただし、いわゆる〝喜劇〟に報復原理が含まれていれば笑うかもしれないが―。出演人物たちが互いに射ち合ったり、頭をなぐり合ったり、眼前でドアーをひどく閉じたり、他人を断崖やビルディングや船などから突き落としたりするのを見るのはとてもおもしろいと人々は言う。何がおもしろいものか！

一方、テレビのプロデューサーたちはもっとよいものが作れると言っている。演し物によっては優秀なのもある。特に大自然界に関するようなものがそうだ。この点で多くのレッスンが学ばれねばならない。海や空の力、天候とそのパタン、さまざまの環境下における動物や植物の生命等々。そうだ、プロデューサーのなかには真の能力を見せた人もある。多くのプロデューはだめだったけれども、常に改良の機会はあるのだ。

われわれはあらゆる国の人々に愛と理解を伝えるために、電気仕掛の発明品―テレビ、ラジオ等を利用できる。言いかえれば、われわれは教育目的のためにこれらの媒体を利用しなければならない。人々を神秘と迷信から解放し、一世界の兄弟姉妹として結集させるためである。この目標を達成するにはどうすればよいか？　一つの方法としては人々が宗教界、政界、産業界のリーダーに手紙を出して、すぐれた教育システム、真実の公開、平和等を要求することである。大衆というものを形成している平均的市民であるわれわれが良き世界を要求しなければ、この文明のリーダーたちは聞こうとしないのだろう。リーダーたちの多くは自分の地位を固守しようとして、大衆の気にいるようにしようと懸命になっている。このことは教会、各国政府、産業界の大立物等にあてはまる。忘れてならないのは、大衆すなわち路上の普通人の支持がなければ、リーダーの率いる組織も存在しないということである。リーダーに権力を与えているのは大衆なのである。

ここで別な問題に入ることにしよう。商店の棚を満たしている無数の軍用関係オモチャである。破壊や殺人のアイデアと関係のない穏当なオモチャを見つけることの困難さを知るには、店内をすみずみまで探さねばならない。ときには弁解として破壊を〝自衛〟と称したりするのだ。

子供たちが機関銃の操作法や手りゅう弾の投げ方を初めて知るときに、子供を非難することはできない。われわれはしばしば弁解をする。「あれはただのオモチャなんだ。だれもケガはしないよ」ここで私が言いたいのは、オモチャであるからというのではなく、子供たちの無邪気な心の中に忍び入る破壊の思想である。ゆえに非難されるべきはわれわれおとなである。われわれは子供がオモチャの銃を仲間に向けて発射のまねをするときの顔の憎悪の表情を一度でも観察するべきである。「パン、パン、パン！　おまえはもう死んだぞ！　死ななければもう遊んでやらないぞ！」このことは世界中で行なわれているのである。子供たちを見るとよい。立派に飾りたてた軍人のまねをしようとするときに、子供たちが如何にいやしく残酷になろうとするか。われわれはそれを信ずるために実状を見る必要がある。こんなオモチャを子供に買ってやって、このくだらないゲームをやらせているのは、われわれ自身のだらしなさによるのである。大抵の場合、われわれは子供が成長して親を悩まさない限り、子供のことに気を使わない。しかし子供を持つことは責任を持つことを意味するのである。

別な惑星から来た人々は私にむかって次のように語ったことがある。「あなたがた地球人は天国について夢見ているが、不可能だと思うことを可能にしようとしない。殆ど何もできないと思い込んでいる。だから何もしない。しかしどこにいても、どこの家庭でも町でも国でも、わずかな行為がいつかはあなたがたが夢見ている結果をもたらすのだ」

これは私が最近見た新聞の漫画を思い出させる。子供たちが両親に尋ねる。「おとなはただ立っているだけで何をしようというの？世界の諸問題を解決しようと努力したらどう？　いつまで待っているつもりなの？」

そこで両親は答える。「わしらはあと二十年間待つつもりなんだ。そうすれば責任がおまえたちのものになるからね」

宗教団体の問題に返ることにしよう。いうまでもなくこの世界の宗教は人類に平和をもたらすことに失敗した。なぜなら宗教団体自体が、自分たちが信じていると称する事柄を生かしたり、敢然とそれに対処したりすることができなかったからである。人間を殺すことはあらゆる宗教によって禁じられているとはいうものの、彼らはやはり金を得るため、大衆の力とコントロールを受けているために、多くの戦争を支持している。戦争というこの最も原始的なゲームで危険にさらされる生命は無を意味するのである。われわれがやれるのは祈りだけである。しかもなおよいことには、現在われわれがやっているのはその〝祈り〟なのだ。世界中の無数の人々が平和を求めて祈っている。しかるに祈りが戦争を防止して人間に平和をもたらしたであろうか？　実際この場合は神が人間にかわって混乱を一掃してくれることを願いながらも、自分自身をあざむいているのではないだろうか？　人間が無知のなかに生きていて剣を捨てようとしない限り、自分が剣によって罰せられるだろう。人間が兄弟の生命をねらえば相手から自分の生命がねらわれるのである。イエスの語ったこれらの言葉は永遠を通じて真実であろう。われわれが天の父の子になろうと思えば、内奥の〝天の父〟から来る援助と指導とを待てばよい。われわれの子供たちが生まれたときにはこのような神の子であるのに、両親の無責任によって全くのエゴに化さしめたのである。ゆえに子供たちを宇宙的人間にしようと思えば、それは親たるわれわれにかかっているのだ。

イエスは言った。「肉欲は滅びる運命にある」これは人間のエゴの心は神の真の美を知ることなしに滅びるという意味である。永遠の生命を獲得している―というよりもむしろ異なるさまざまの人体によって（生まれかわりによって）得た過去の体験の永遠の記憶を持っている―宇宙的人間は、〝父〟の支持を受けている。本人は〝父〟の英知〟をあらわしているからだ。

七才になる私の息子が次のように尋ねたことがある。「お父さん、もしぼくが悪い事をしたりあやまちをやったりしたら神の罰を受けるの？」

私は答えた。「われわれが正しいやり方を知ることができるのは、間違ったやり方をするからなんだ。われわれはいつもなるべく早く自分の過失を正すようにしなければいけない。自分のエゴに振り回されてはならない。われわれが過失から何かを学び取りさえすれば、間違いをやったからといって神は罰するようなことはしない。多数の人の生命を悲惨にしたのは、たとえば地上の戦争のようなくり返される過失なのだ。戦争という過失を正そうとしないために、人間

の悲惨な運命が罰となって返ってくるのだ。つまり人間が自分を罰しているのだ！　間違った状態を正すのは人間の仕事だからね」

太陽は万人に等しく輝いている。〝父〟はその子たちに生命力と英知を与えて、子たちが生命と創造の目的をやがて理解することを願い、万人が時空を支配している〝父の至上なる英知〟に気づくように意図しているのである。

近隣の惑星から来る友人たちは単にレッスンや尊重感を教えるためにのみ彼らの子供たちを訓育している。そこにはきわめて有効な方法がいくつかあるが、それは子供の好きなゲームをやらせたりテレビを見せたりするのではない。やがて子供たちは過失を修正したがるようになる。

子供には自分のオモチャを他の人にも等しくわかち与えるように教え込み、〝自分のもの、他人のもの〟という分裂をさせないようにしなければならない。というのは、自分の物は何一つ存在しないからだ。肉体でさえも自分の物ではない。われわれは地上の生活を体験する間はあらゆる物を利用してよいが、そのあとどこへ行こうともそれを持って行くことはできない。

「問題なのはお金と物質の財産である」と子供に信じさせるほどに極端に走ってはならない。有名になったり尊敬されたりするために財産を貯えることよりも、自分自身の半身に気づくことのほうが子供にとってはるかに重要である。

イエスやアルバート・シュバイツァー、その他幼児期に自分の半身に気づいた人は、多くの実業界の大立物よりも今日はるかに多くの尊敬を受けている。ただしこのことはお金または貨幣制度を私が非難しているという意味ではない。金というものがなくなれば大混乱が発生するだろう。

いわゆる圧力または命令がなければ人間は仕事をやりたがらないものである。われわれの倫理の水準は現在まだはるかに低すぎるので突然に貨幣制度をなくすことはできない。生活を困難ならしめているのは貨幣制度というよりもむしろ利潤制度である。これが殆どの害の原因である。労働者の仕事を楽にしてやらないで、人間のかわりに機械が作られて労賃が切り下げられる限り、われわれは真のトラブルを持つことになる。多数の失業者が買う力を持たないのに、オートメ工場で巨額の利益をもくろみながら自動車、冷蔵庫、テレビ受像機等を作って一体何になるだろう。とすると何が起こるかはだれにもわかる。アンバランスな経済システムを立て直すために戦争が行なわれるのだ！

そうすると、多くの人が子供をなるべく早く世に出して金をもうけさせ、わずかな金で他人を利用させようとするのは全く愚かである。

一九六六年に三ヵ月半ばかり私がコンタクトしていたスペース・ブラザーズ（宇宙人）の一人は言った。

「地球人は幼少の頃から報酬として金をあてにして働くように教えられるために仕事に真の幸福を求めることができないのです」

大抵の地球人は〝金を求めて一生懸命働いた〟かもしれぬにしても、賃銀を受けるときは罪の感じを起こすのである。

宇宙人の友はくり返し言った。「これは大抵の仕事が金をあてにしてなされるためです。あなた方は同胞のために最大の能力を発揮して数時間の奉仕さえしようとはしません。他人のためにわずかな奉仕でもするようになれば真の幸福感が心を満たし、金は第一義的な価値を失うでしょう」

やはり私としては金そのものがすべての悪の根源ではないと思う。むしろこの現象界で金を愚かに扱っている人間にこそ問題があるのだ。（第六章終り。以下次号）

トピックス

斎藤雄久君、円盤を16ミリ映画に撮影

本誌先号に8ミリ映画による円盤撮影の手記を発表した日本GAP会員斎藤雄久君は、またも16ミリ映画撮影機で円盤の撮影に成功し、8ミリ映画と共に十一月八日の日本GAP総会で公開されて来会者を感嘆させた。

去る十月十八日、今日は円盤が出現するかもしれないという予感にせきたてられた同君は、証人として親友のI氏を誘い、昼すぎから池袋の西武デパートの屋上で購入してまもないボレックスMP型撮影機をかまえながら待機中、午後三時四十分頃突如現われた円盤を見事キャッチした。このフィルムはただちにスポニチ社写真部へ送られて現像された上、写真専門家たちの子細な検査を受けた結果、ホンモノと断定。総会に間に合ったので番外上映を行なった。画面に出てくる時間は短かいが、黒く丸い円盤が白黒フィルムにはっきり写っている。総会々場では大画面に映写したのと場内が暗黒にならなかったために見づらかったが、これらのフィルムは横巾三十センチ程度の小画面で見ると円盤が非常に鮮明に見える。なおこれらのフィルムは日本GAP所有ということになったので、今後は例会その他の小集会で上映する計画である。フィルムの複製販売は一切行なわない。

植物にも神経がある

本誌第42号に植物が意識を持つことに関する米国での実験報告が掲載されたが、それを裏付ける実験が今度はソ連で行なわれて、アダムスキーの説が正しいことを立証した。プラウダ紙が十月二十日に報じたところによると、ソ連農業アカデミーのインドール・グナール教授らは、植物にも人間の神経に似た電気信号があることを確認し、植物が発信した電気信号を記録することに成功したという。グナール教授は言う。

(1)種々の実験によって植物も人間の神経電流に似た電気信号を出すことが確認された。植物は外部からの信号を受け取り、特別な径路を通じてこれを中枢部に伝え、ここでその情報が受信されて処理される。何かの命令が司令部分に与えられると、これが外部信号の受信部分によって送り返される。

(2)このシステムの詳細はまだ判明しないが、存在することに間違いはない。電気生理学的方法を応用すれば多数の植物のナゾを解明できるだろう。

(3)電気装置による実験で、植物が記憶能力を持つことや、植物の根が人間の心臓の筋肉のように収縮することがわかった。また植物は一定の生活のリズムを持っており、夜間に休息しないと死んでしまう。しかも植物は明るさや暗さを識別でき、実験用の温室で植物が電気のスイッチを点滅させた。根の付け根の部分に情報収集センターがあると思われており、植物学者たちがこの部分を研究中である。

宇宙飛行士、月面に怪光を発見

ペンシルバニヤ州イーリーのタイムズ・ニューズ紙一九七〇年七月二十日付によると、アポロ11号の宇宙飛行士アームストロング、オルドリンの両名は、月を回る最初の軌道に乗ったコースからずっと北側にある一個のクレーターの内壁に不思議な光点(複数)を見た。アームストロングは言う。「クレーター内は異様に輝いていた」このクレーターとはアリスタルコスである。三十六分間のテレキャストのあいだ、二人は美しい月の或る場面にカメラを向けた。そこは二人が着陸する際のチェックポイントとして役立つと思われた場所である。怪光の発見はその後まもなく起こった。科学者たちはこれを火山活動と片づけたが、飛行士によれば螢光を帯びていたという。

二つのコンタクト事件

以下の各記事は少々古いが、信ぴょう性あるものとされている。〈その1〉はデンマークGAPリーダー、ハンス・ペテルセンより報告されたもので、〈その2〉は米国のシャーロット・ブロップから来た資料である。

〈その1〉

米国の或る退役将校がハンス・ペテルセンに送った手紙により、送り主が一九五一年に宇宙人とコンタクトしていたことが判明した。これはアダムスキーの最初のコンタクトよりも一年前のことであるが、この宇宙人たちはアダムスキー事件の宇宙人たちと同一の人々ではないかという。以下はその内容。

「前略—さて例のいわゆる空飛ぶ円盤について君に伝えようとする事柄は洩らしてもよいが、私の名前は絶対に秘密にしてもらいたい。まずはっきり言えるのは、私は十一年前（一九五一年）の或る夜ふけに印刷の仕事を遅くまでやっていた時、宇宙人とコンタクトした。大抵の知的な人と同様に私も関心や好奇心があったが、まさかコンタクトするとは思わなかった。彼らは店のドアーの所へ来てあけるようにと言うのでそうすると、二、三フィート離れた頭上に一機の大きな物体がいるのに気づいた。私は中へ乗せられて初めてテレパシーの最初の体験をした。これは非常に有益な数分間だった。彼らはすぐに元の位置へ帰ると言ったが、言葉通りに帰って来た。彼らは私が地球上の政府や宗教界の指導者たちとコンタクトすることをすすめた。だから相手の（指導者の）許可がない限り私の名を洩らすわけにはゆかないのだ。もし私の正体や仕事の内容が知れるようになれば、たちまち危険になり、ひそかに遂行している仕事が水泡に帰することになるだろう。

さて、彼らが（宇宙人たちが）完全な英語を話す能力を持つことについては、次のとおりだ。たとえば君が二千年間金星のすぐそばにいて、金星で話される会話を聴いていたとする。そうするといくらなんでも君は金星語を流ちょうにしゃべれるようになると思うだろう。ところが彼らは想念のみを用いて、言語を口にしない。一方地球人は習慣によって言語をしゃべる。そこで地球のすぐそばまで来ている金星人はこれを聴き取ってわれわれの言語を完全に学ぶのだ。だから金星人が君の職場や家庭や路上などで話しかけて来ても地球人と見分けがつかないだろう。ただ外見上の大きな相違は相手の美しい顔付きと完全に均整のとれた体格である。私が言っているのは金星人のことだ。私が得た知識によると、金星人は地球人よりも一歩進んでおり、火星人は一歩遅れている。

もう一つ話そう。君は最近一言語で話しかけるとそれが別な言語になって出てくる翻訳機に関する記事を読んだことがあるだろう。このような装置は元々金星から源を発するのだ。つまりこの機械に関する明確なプランや詳細は金星人の想念によって科学者たちに最近送信されたのであって、科学者たちは自分らがそのアイデアを考え出したと思い込んで開発したのである。その他にも多くの装置がこのはるかに進歩した人々から地球人に与えられつつあるが、これはほんの序の口にすぎない。結局こんなふうにして、金星人が彼らの宇宙船の近くにいれば、彼らは完全な英語で話しかけることができるのだ。相違といえば、彼らは翻訳機械に想念によって送信し、それを機械にしゃべらせるのだ。私は自分の仕事でその機械を使用

してきたので、それが役立つことを知っている。

さて、以前の問題に返ることにしよう。火星人が地球人よりも遅れているということになれば、問題が起こるのも当然だ。つまり、なぜ彼らが宇宙船を持ちながら地球人はそれを持たないかということだ。彼らが私に与えてくれた情報によると、地球人もかつては、あの聖なる書物が〝大洪水〟と記している時代以前に宇宙船を持っていた。しかし現代と同様に、当時の地球人も自分たちが強大だと思い近隣の惑星群を征服することにきめた。そのために地球上でも戦争が起こり、その結果、例の〝大洪水〟が地上の文明の大部分を抹殺してしまったのだ。現在この地球から数十万フィート以内に七個の惑星から来た宇宙船がいると聞かされている。彼らはわれわれの友であり、地球人をあわれんで、援助したがっている。またこの太陽系内には十二個の惑星があるとも教えられた。これまでに教えられてきたような九個だけではないのだ。従って宇宙船を持たない惑星が地球を入れてまだ五個あるわけだ。—後略」

〈その2〉

—サンセバスチャン—ブラジル

一九五七年七月の或る日の午後七時十分頃、サントス市のカトリック系法学部のローマ法の教授で弁護士のジョアン・デ・フレイタス・ギマライス教授が海岸近くですわっていた。その時彼は一個の輝く帽子型の飛行体が海から接近して来て近くの水辺に降下するのを見た。すると機体が開いて金属のハシゴが投下され、球体のついた着陸用の線も出てきた。

身長五フィート十インチ以上で長くきれいな髪を肩まで伸ばした二人の背の高い男がハシゴを降りてきた。顔はきれいで、マユゲがあり、外見は若々しく、賢くてあわれみ深い眼をしていた。二人共緑色の上下続きの服を着ており、首と手首と足首の所がしぼってあった。教授はすぐに「どこから来たのか?」とイタリヤ語、スペイン語、フランス語、英語等で尋ねたが、返答はなかった。その時彼は相手がテレパシーで機内へ入るようにすすめていることに気づいたので、入って行ったが、その際、相手は片手を使っただけで軽々とハシゴを飛び上がったが、彼は両手を用いねばならなかった。照明された室内に一個の丸いイスがあったので、彼は乗員たちと共にそこへすわった。すると機体は上昇して空中を進行した。帰る途中彼は自分の時計が止まっているのに気づいたが、大体に三、四十分経過したと思った。あとで教授が新聞社に語ったところによると、この〝人間たち〟ははるかに進歩していて、地球の野蛮人どもに対して、蛮人たちが行なっている種々の危険な遊びをやめるように警告したがっているのだと語った。

（注＝ここでシャーロット・ブロッブは注を入れて、アダムスキーの〝空飛ぶ円盤同乗記〟の一部分を引用している。すなわち、宇宙人とコンタクトしたのはアダムスキーばかりではなく他にもいるというくだりである。多数の人がコンタクトしたけれども、なかには体験をしゃべったばかりに殺された人もいるし、沈黙を守っている人も多いという。しかし日本で発表してもまさか殺されるようなことはないだろう。経験者はぜひ報告を寄せられたい）

問　金星へは仲々に生まれ変われないと何かに書いてあったかと思い、私もそう信じてきました。ところがアダムスキーの妻メリーが金星に生まれ変わったとのことですが（もちろんア氏の説は九九パーセントは信用していますが）、ア氏自身ならともかく、彼女程度の心境の人間が？といっては失礼か知れぬが、果して金星に生まれ変われるものでしょうか？　とすると金星には我々が想像する程高級人ばかしは住んでいないのでしょうか。彼女が地上でア氏の妻だといってもそんなに高い心境の持主であった様には記されていない。この点、前から疑問に思っていました。　（東京　羽鳥雅己）

答　アダムスキーの妻メリーが一九五四年に死亡して、金星で生まれ変わってから少女の姿でアダムスキーと対面して、地球上でまだ知られていない種々の事実や哲学を語った様子は〝空飛ぶ円盤とアダムスキー（高文社刊）〟に述べられてあり、これによって惑星間の生まれ変わりの事実をアダムスキーが具体的に知らされたということになっています。ところがその少女の語った高度な説明の宇宙的内容からみて生前のメリーがパッとしなかったような印象をアダムスキー問題研究家は持つかもしれません。大体アダムスキーは在世中に妻のことには殆ど触れることなくこの世を去ってしまいました。しかるにほう大な文献中でわずかながらも重要な言及を見出すことができます。それは妻メリーは生前に「この人々（彼女の両親）と、彼女が特に好きであった或る姉）は金星で生きているのだとよく口ぐせのように言っていましたので、自然、私は（アダムスキーは）メリーと語っているあいだもこの問題に心が傾いていましたが・・・」という部分です（注＝高文社刊〝空飛ぶ円盤とアダムスキー〟二十頁）。一般人が人間の輪廻（生まれ変わり）はおろか惑星間の流転の可能性などを全く考えもしない現状からみて、メリーが教養の程度の如何にかかわらずこのようなビリーフ（信ずること）を持っていたことは、彼女の内奥に普通人とは全く異なる宇宙的な高貴なる魂がひそんでいたのではないかと考えられます。それは単なる知識や知能のカテゴリーとは無関係な、人間の持つ或る根源的な実体であると思われます。それに如何なる男といえども自分の妻をほめることはしないでしょう。ゆえにたとい、メリーがすばらしい心境の持主であったにしても、アダムスキーの口からそれを伝えることはまず期待できなかったでしょう。そこで結論としては、魂の部分において高度な絶対値を持つ人は、この世界での知識はなくても別な惑星に生まれ変わる準備ができていて、実際には自分が気づかなくても宇宙的コースを歩んでいるのではないでしょうか。その点については「彼女が私と一緒にいた頃、宇宙の法則について私たちが議論したり彼女がそれを理解していないと私が思ったことなどをメリーは思い出しながら微笑するのでした。たしかに彼女は私が感じていたよりもはるかに深い理解力を持っていたのです」（注＝同書十二頁）という部分がそれを裏付けしているように思われます。

質疑応答

回答・久保田八郎

問　ア氏は臨終の際（注＝死亡の直後の意？）ブラザーズによって新しい肉体を与えられたらしい、とありましたが、妻メリーは普通に死んで金星に生まれました。とするとア氏は生まれ変わったという方法ではなくて、ブラザーズの助け、配慮によって別な肉体を与えられたことになるのでしょうか？　とすると金星といった他の天体ではなく再び地球人としてどこかで使命の遂行に従っていることも考えられましょうか？　またア氏が西洋人らしくユダヤ系らしく人を憎む感情（敵に対して）がやや強いのが気にかかります。またタバコをたしなむのもです。　（同）

答　アリス・ウェルズらの推測によりますと、アダムスキーはおそらく金星で幼児としてでなく少年か青年の肉体を与えられて生まれ変わったのではないかということです。つまり幼児として再生しなくても彼の偉大な魂は少年期の過程を必要としないほどに発達していたというわけです。これについては数年前に英国でコンタクト事件が発生して、出現した少年の宇宙人が自分はヤムスキーという名前だと名乗ったために、アダムスキーの生まれ変わりではないかと騒がれたことがありましたが、GAP側は否定しています。結局、死後のことに関しては不明です。

彼に人を憎む感情があったとは私には考えられません。彼の文献を読みますと多くの敵があったかの如く感じられるかもしれませんが、それは彼自ら作り出した敵ではなく、一方的に攻撃してくる反対論者やサイレンス・グループ（暗躍団体）ばかりで、それに対して釈明をしなければならなかったことが〝憎悪〟の如き印象を受けるわけです。なにせ前代未聞の体験記を発表したのですから、すさまじい攻撃の的になったことは容易に想像できます。こうした場合は西洋人には弁明をする習慣があり、黙殺すれば相手の言い分を認めたということにされるのです。「燕雀いずくんぞ鴻コクの志を知らんや」というような調子で沈黙できないところが東洋人との大きな相違点です。タバコの件についてはよくわかりません。母船内でたしなめられてやめたかどうか不明ですから、この件は米国のGAP本部へ照会してみましょう。しかし、たしなんでいたにしても度を越さない程度ならば差支えはないと思いますが、如何でしょう。

問 大体、円盤研究者は「宗教」（いわゆる）を否定している様に見受けます。しかるにア氏等の言葉等には随所、殆どと申してよい位、神が使ってあります。そのことから私はあまり宗教を否定することはないと思うのです。何々を否定する場合、その何々、つまりここでは「宗教」とは何ぞやが確かめられなくては否定も肯定もできません。もし否定する人は「宗教」というものをその概念を如何様にとらえているか。もちろん、教会・教団を言っているのではない。古代は特に宗教とは呼ばなかった。近代になって「政治・経済・科学」等に対し「宗教」といわれたようですが、つまり「宗教」といい「円盤」といい「科学」でも真理は一つのはずです。つまり「宗教」に真理がなく真理は「円盤」にだけとみるとしたら早計と思うのです。それにア氏が（大意）「西洋、東洋の全部の宗教を自分は知っているが、どれもダメだ」と言っているのが気懸りです。どこがどのようにダメなのでしょうか。それに聖句の意味をア氏流に？断定しているのも少し気になります。（同）

答 まず重要なのは、アダムスキーは宗教それ自体をダメだと言ったのではなく、〝宗教団体〟または〝宗教家〟のあり方を批判しているという点です。そのことはかつて彼が「宗教家への提言」と題する檄文を世界中の教会へ送った事実からみてもわかります。つまり彼は宗教を全くダメなものとして無用の長物視していたのではなく、実は非常な関心を持っていたのです。彼がダメだと思っていたのはあくまでも〝教団〟のあり方ですから、その旨をご了解下さい。

そこでこれから私が〝宗教〟という場合は〝宗教団体〟またはそれを構成する聖職者などを意味します。過去数千年の歴史を概観すればわかりますように、文明の発達に際して宗教が演じた役割が果してどの程度のものであったかは容易に判断できます。中世においてはむしろ宗教は科学の発展を阻害し、宗教裁判においては極悪非道な刑罰を加えています。究極的にみて宗教が人心を安寨ならしめたというよりは、人間に恐怖心を与えた面が強く、また人間に自己催眠効果を起こさせて信者を思考停止型人間にした事実は現代でも多分に見られます。また多数の宗教は（厳密に言えば、宗教団体は）この広大な三次元空間を考慮に入れることなしに、主として概念の産物を説くだけでした。従って彼らの主観的世界はこの人間界とそれに対応する莫然とした幻想的な〝天国〟または〝浄土〟だけで、宇宙空間に存在する現実の太陽系とか、進化した人類が住んでいるかもしれない惑星群などを意識に入れていません。このため結局彼らにとっての宇宙とはこの地球だけということになり、事実その程度の認識によって宗教活動が行なわれてきたにすぎません。ところがイエスは他の惑星群や物理的宇宙空間にも言及しているのであって、普通の宗教の教祖とは異なる人物であることを新約は示しています。大体、新約聖書というのは一宗教の教義録ではなく、実は当時行なわれたイエスとスペースブラザーズとのコンタクトの記録であるというのがアダムスキーを中心とするGAP側の解釈です。この驚異的実録は後世において全く理解されず、甚だしく歪曲されて

いつのまにか宗教の教典にされてしまいました。そして教義の解釈をめぐって教団が分立し、キリスト教だけでも多数の分派が各自の勢力争いに汲々としている状態です。宗教の定義になるとむつかしく考えればきりがありませんが、岩波国語辞典によれば「神または何らかのすぐれて尊く神聖なものに関する信仰」とあります。大体この程度の概念でよいのではないでしょうか。ところでアダムスキーが文献中でしばしば神という語を使用するのは全く訳者たる私に責任があります。彼はよく（直訳して）〃至上なる英知〃という語を使用しますが、それを簡単に〃神〃と訳したのは拙かったと思い反省しています。アダムスキーやブラザーズの言う神は日本語の神とはかけ離れた深い意味を有していると思います。「円盤のみに真理がある」の件ですが、アダムスキーはそのような事は言っておらず、惑星間飛行物体の背後に存在する壮大きわまりない宇宙的現実と、地球人の想像を絶した超高度な物質文明や精神文明を伝えたのであって、その前にあっては地球の宗教家の諸説などはまさに井アの管見にすぎないとも言えるでしょう。ただし少数の例外はあります。

問　よく予言者と呼ばれる人がいます。この中にはインチキな人もいるでしょうが、よくあたる人もいます。この人たちは遠い未来の事を予言します。どうしてこんな事がわかるのですか。テレパシーとはラジオの受信機のようなもので、発信者がいなければならないものでしょう。それなら予言の場合はどこから何を発信しているのですか。

（大阪　山上賢二）

答　この空間は何もないのではなく、波動で形成されているという事実を知る必要があります。ごく簡単に言えば、その物理的波動が或る一定のパタンを持つ場合、それを感受すれば未来に発生する事象を予知できるとも言えます。しかし何かの干渉によって波動に相互作用が起こればパタンに変化が発生するために、予言があたらないということになります。ゆえにアダムスキーは予言を信じるなと警告し、ブラザーズといえども未来の現象は予測できないのだと述べているわけです。これについて物理学者の村雨光之助の物理学的解釈は次のとおりです。

「粒子の固有状態は、相対論的球関数（文献1）

$$Ⓗ_n^L(\theta)=\sin^L\theta\left(\frac{d}{d(\cos)}\right)^L C_{n-1}^{L}(\cos),\quad(1)$$

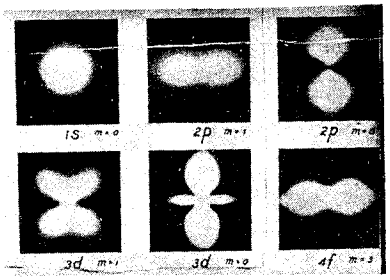
で記述できます。その規格化は

$$\int_0^{\pi}Ⓗ_n^L(\cos\theta)Ⓗ_{n'}^L(\cos\theta)\sin^2\theta\,d\theta=\frac{\pi}{2}\cdot\frac{(n+L)!}{n(n-L-1)!}\delta_{nn'},\quad(2)$$

です。ただし　$ct=r\cos\theta$　$0\leqq\theta\leqq\pi$、$0\leqq r<\infty$

ですので、無限の過去から無限の未来にわたる時間が粒子の波動に関係しております。その波動は写真の如き物です。（水素原子の例）

未来の波動を、相互作用のない場合には定まって推定できます。この波動は一種の確率であって、〃確率波〃と称されています。物理的実体そのものが一種の確率で描述されているのが現代物理学の根本原理なのです。一般の事象はやはり写真の如き波動の重合せであると同時に相互作用がありますが、確率波に推計学の確率がかかった形で推測できるでしょう。未来観察機に写る描像は、遠い未来に行くほどボケるでしょう（同調のはずれたテレビの像の如き物）。この種の確率波を感受する能力の有る人が〃予言者〃なのでしょう」



参考文献（1）村雨光之助「超相対性理論」二宮工房（一九六九）四三

問　〃意識的意識〃をどのように理解し

たらよいかという質問に対して私は（質問者は）次のように答えることにしていますが如何でしょうか。まず意識という熟語ですが、これはコンシャスネスの訳語です。意は「おもう」ことですが、「思う」よりは推量し、疑うという意味をよけいに持っています。識は「しる」ことですが、「知る」よりは浅い意味のときに使います。人間には意識があり、意識があるから「しる」ことができ、しることによって「おもう」ことができます。

宇宙の英知を仏教では平等の大智といっています。万物に平等に働いている智、万物に平等に備わっている智という意味です。宇宙の英知を神と呼んでいます。神には祈りがつきものです。ですからイエス様も祈っておられます。祈れば応答して下さるからです。応答があるということは、宇宙の英知には意識が備わっているということです。そしてその意識は、私たちの意識とは同一ではないけれども、同じような性質であることを示しています。でなければ、神さまと私たちの間に意識の交流がなりたたないからです。そこで意識的意識という言葉が生まれます。的という文字の上下に意識の文字がありますが、上の意識は私たち人間の意識であり、下の意識は宇宙の英知に備わっている意識と考えることができます。したがって意識的意識とは私たち人間に備わっている意識と同じような意識という意味になります。次は反対に、上の意識は宇宙の英知に備わっている意識であり、下の意識は私たち人間に備わっている意識と考えることもできます。この場合の意識的意識は、宇宙の英知に備わっている意識と同じような意識という意味になります。的という文字を「・・・と似た」とか「・・・と同じような」という意味にとるわけです。

アダムスキー師の哲学に接したとき、この意識的意識という言葉に迷いがちですが、私は以上のような理解のもとに、二つのうちのどれをとるかを判断しているのですが。（神戸　巽　直道）

答　意識的意識というのはコンシャス・コンシャスネスの訳語で、この意味は「宇宙の意識（神とでもいうべきもの）に気づいている人間の意識」というような意味です。一般人の意識は〝宇宙の意識〟に気づいておらず、大体に結果の世界（現象）しか意識していません。ゆえにまだ一種の催眠状態にあるといえますし、イエスは「死者の棺をかつぐ者も死人である」と言っています。とにかく意識的意識というのは巽先生の二通りのご解釈の内、後者を意味するアダムスキー独特の造語です。一般人をメクラ扱いにするわけではありませんが、イエスの言う〝死人〟の意味は容易に理解できます。たとえば今夏私は大阪GAP大会に出席の前日、万博へ行きましたが、出口の所でイザリの青年が両手に下駄をはめてイザリながら出て行く姿を多数の人がゲラゲラ笑いながら見ている光景を目撃した私は悲痛の念にかられましたが、一般人の意識というのはその程度のものなのであって、全く現象の形態だけに振り廻されて生きているとしか言えません。地面をはってでも万博を見に行こうというイザリの青年の偉大な勇気や生命力を感知する力がなくて、外見のみで価値判断をする人間は死人よりもタチが悪いと言えるでしょう。何も言わない死人の方がまだましです。宇宙の意識を感知する意識という場合、万物に生命を与えている宇宙の超絶的な力（としか他に言いようがありませんが）を感知している人間の心という程度の意味に考えるだけで充分だと思います。これを学問上の心理学や哲学の用語にあてはめてむつかしく考えれば、折角のアダムスキーの苦心が無になるおそれがありますので、私自身はアダムスキーの思想を一般の学問的解釈と結びつけることは極力避けております。たとえばセンスマインドを感覚的自我と訳す人がいますが、これは肉体の各感覚器官（眼・耳・鼻・口等）が持っている独立した〝心〟という意味であって、これを〝感覚的自我〟としたのでは何のことかわからなくなってしまいます。

＜新訳＞

空飛ぶ円盤実見記

ジョージ・アダムスキー

ジョージ・アダムスキーが他界してより五年有余になるけれども、彼の体験記類がフィクションであったという決定的な反証はなく、依然として多くの謎を残したまま多数の研究者の支持を受けている実状にかんがみて、彼とデスモンド・レズリーの共著で第一弾となったFLYING SAUCERS HAVE LANDED、邦訳版〝空飛ぶ円盤実見記〟高文社刊）の内、アダムスキーの手記の部分のみを新訳することにした。この手記はアダムスキーが円盤研究に打ち込むようになった動機から始まって、かの有名な一九五二年十一月二十日のモハービ砂漠における金星人との最初のコンタクト（会見）に至るまでの模様を詳述したもので、刊行当時は世界の円盤研究界でダイナマイト的書物として研究者連を驚嘆させて計り知れない影響を与えたのであるが、現在に至るもスペースブラザーズとコンタクトを願う人たちのためのバイブル的指導書として無限の価値を有するものであると信ずる。惜しいことに高文社刊訳書（高橋　豊氏訳）の訳文中には不備な個所が多々散見され、あたら驚異的内容を持つ書がいかがわしいフィクションであるかの如き印象を与えるために、多くの誤解を招いたことは残念であった。そこで今回訳者久保田八郎は浅学非才をもかえりみずに新訳に打ち込んで正確な内容を伝えることにした。大方のご期待を乞う次第である。

ありし日のG・アダムスキーとアリス・ポマロイ女史．アリスは現在もIGAPのために活躍中．

訳文としては内容の重要性にかんがみて美文調または文学調の意訳は避けることにし、原文に忠実な平易な逐語訳にした。大体に原文も平易簡潔な英文である。原書はロンドンのワーナー・ローリー社版を使用した。なお翻訳の正確を期するために訳者の職場における同僚の米国人ジーン・ディキンソン氏と英国人ダイアナ・クック夫人の両名から折にふれて英語の語法に関する教示を受けた。感謝する次第である。二人共一流大学出の秀才と才女であり、語学のインフォーマントとしては上の部に位するが、アダムスキー支持の点は別問題である。訳者が聞いたところによると、ディ氏はアダムスキーの事を知らず、ク夫人は在英中にアダムスキーの各種著書類を読んでいて相当な関心を持っていた。

本誌に掲載する邦訳は高文社刊〝空飛ぶ円盤実見記〟の第一七九頁以後の部分に相当し、今後数回にわたって全訳を連載する予定である。本篇完結後は更に〝空飛ぶ円盤同乗記〟と〝空飛ぶ円盤の真相〟に至るまで改訳に着手して、逐次本誌に連載する。なおアダムスキーの著書類の日本における翻訳権は久保田八郎のみが有することを付言しておく。文中カッコ内の注は訳者による注である。

＊　＊　＊　＊　＊

第一章　ジョージ・アダムスキー

私はジョージ・アダムスキーで、哲学者、学徒、教師、空飛ぶ円盤研究家でもある。私の住み場所はカリフォルニア州パロマー山の南側斜面にあるパロマー　ガーデンズであり、そこは世界最大の二百インチ望遠鏡の本拠である巨大なヘール天文台から十一マイルの地点である。そして一般に流布した誤りを訂正するためにここで言わせてもらうと、私は現在その天文台の職員ではないし、今までも職員であったことはない。そこの職員の幾人かと親しくしているが、その天文台で働いているのではないのである。

パロマーガーデンズで私は二台の望遠鏡を所有している。両方ともニュートン式反射望遠鏡である。ひとつは十五インチで（注＝筒の長さではなく、反射鏡の直径が十五インチの意）、ドームの中に設置してあり、もうひとつのティンスリー研究所で製作された六インチの専門家用のものは屋外にすえてある。こうしてこの望遠鏡は容易に素早くどの方向にも向けられるし、また固定マウンティング（注＝架台。普通は日本語でもマウンティングと言っている）から楽にはずされるので、望みの場所へ持ち運びができるようになっている。そうした機会のために望遠鏡をのせるための三脚を持っているし、またこの小型望遠鏡用としてアイピース（注＝接眼鏡。これも普通はアイピースと言われている）上に素早く取り付けられるカメラも持っている。円盤を撮影する以前はこの装置を天体写真撮影用に使用していた。しかし私はプロ写真家ではない。

この小型望遠鏡は約二十年前に友人兼教え子（注＝同一の一人物を意味する）からもらったもので、その時から天体観測と望遠鏡写真術が私にとって魅惑的な趣味となった。そうしているうちに円盤がやって来た。それ以来その趣味がフルタイムの一少々費用がかかったけれども一仕事になってしまったのである。

私は人生の大部分において他の惑星にも人間が住んでいると信じてきた。そして惑星というものを人間の体験と向上のための〝教室〟と考えてきた。広大な宇宙の中の〝多くの住み家〟とみなしたのである。しかし人工宇宙船による惑星間旅行のアイデアについてはあまり考えなかった。この問題は一九四六年の秋頃までは私の心に入って来なかった。それに機械的な建造物によって横断しようにも惑星間の距離が遠すぎると思っていたのである。しかし一九四六年十月九日の流星雨の際中に、パロマー山のサンディエゴ寄りの南側尾根の上空高く巨大な宇宙船が一機浮かんでいるのを実際に自分の肉眼で見たのである。だがその時はその正体はわからなかった。多くの人が思い起こすだろうが、その夜は各地の人々が空を見つめて、一分間に落下する流星の数をかぞえるようにと（権威筋から）要請されていたのである。

これをわれわれはパロマー　ガーデンズでやっていた。その時、流星雨の最も激しい部分が終わったあとで、われわれが屋内に入ろうとした時、突然一同は高空に一個の大きな黒い物体がいることに気づいたのである。これは形が大きな飛行船に似て、見たところ停止していた。

船室や外部の付属物は見えなかったけれども、戦時中に新しい型の航空機が開発されていたのかもしれず、これはその一つなのだろうと私は判断した。その航空機は落下する流星を高空から調査するためにそこにいたのだろうと推測したので、私はそれ以上のことは

考えなかった。ただ全体が真黒なのを奇妙に思っただけである。われわれがなおも見続けていると、物体は鼻先を上方に向けて急速に宇宙空間へ上昇した。あとに火のような尾を残したが、その尾は実に五分間も見えていた。

物体については何も考えないで一同は屋内に入って、ラジオのスイッチを入れてサンディエゴのニュース放送を出した。ところがみんなはアナウンサーの解説を聞いて驚き怪しんだのである。それによると一機の巨大な葉巻型宇宙船が流星雨の際中にサンディエゴ上空に浮かんでいて、数百名の人がそれを目撃して報告したというのである。その説明の内容はわれわれが見た物と一致していた。

だがその時もわれわれが別な世界から来た宇宙船を現実に見たとは到抵思えなかった。実際、数週間後にサンディエゴから一団の人々が或る日曜日にレストラン（注＝パロマーガーデンズでアリス・ウェルズが経営していた有名なレストラン。これは非常に親切な雰囲気のよい店として〝ホリデイ〟誌に紹介されたことがある）へ来て、流星雨の際中にその人たちも見たというあの大きな宇宙船について話してくれたときまでは、それが宇宙船だということを私は完全に否定していた。地球と他の惑星間の広大な距離と、一般に知られている各種のスピードなどにもとづいて、惑星間飛行物体存在説のすべてを疑おうと懸命になっていた。私は時間的要素と人体が耐え得る圧力の問題を（彼らの面前に）持ち出した。知られている数字類のすべてから判断して、惑星間航行はいかなる人間の生涯においても不可能であった。

私たちがこんな議論をしているあいだ、別なテーブルについていた六名の陸軍将校が、持ち出された論点のすべてに熱心に耳を傾けていた。するとその内の一人が話しかけてきた。「それは、お考えになるほど空想的な事ではありません。私たちはそれについて或る事を知っているのです」何を知っているのかとすぐに聞き返したが、彼らは洩らそうとはしなかった。だが私たちが見て、議論の的になったあの飛行船はこの世界のものでないと断言したのである。当然これによって私はこの問題にいっそうの関心を持つようになった。なぜなら常に私が持っている一つの欲求は真実を知ることにあったからである。その結果、私は更に綿密に空を観察し始めて、あのような驚異的光景が一度起こったからには、再度起こるかもしれないと期待していた。一九四七年の夏中は空飛ぶ円盤に関する多くの議論が起こり始めたが、その年の八月になってついに私の不断の観測が報われたのである。

或る金曜日の夕方、私は一人で広場のブランコに乗って空をくまなくながめ渡していた。すると突然、一個の輝く光体が出現して南寄りの尾根の上空を東から西へ動いたのである。また一個！ 続いてまた一個！

これがあれほど長く待ち望んでいた物だとは気づかないで、私はすわって見つめながら不審に思っていた。だがすぐにその光体群をビーコンライト（航空標識、その他の標識燈）だという考えを捨ててしまった。これらの光体群は眼に見える光線を伴っていない。しかもそれらは私がかつて見たことのあるビーコンとは違った動き方をしていた。私は沢山のビーコンを見たことがあるのだ。突然光体の一つが中空に停止して進路を逆に変えた。それで私はつぶやいた。

「これがいわゆる空飛ぶ円盤だな」

そこで屋内の四人に呼びかけて、この光景を見に出て来いと言っ

た。一同はかぞえ始めた。全部で百八十四あった。物体群は一列縦隊で通過していたが、三十二個ずつの編隊を組んでいるように見えた。このことは確実にわかった。というのは各編隊のリーダーが大空を端から端まで、またはそれ以上も飛んでから、次に合図をするかのように殆ど東方の地平線近くまで引き返すと、まるで分列行進をするように三十二機が一機ずつ通過するからである。それらは一定のコースを進行するように見えたが、或る一群は西方に消えて行き、一方、機体を傾けてから南方へターンして行ったのもあった。それらが傾いた時、中央のボディーすなわちドームの周囲にリングがあるように見えた。

最後の一機が通過した時、それは中空に数秒間停止して二条の強烈な光線を放射した。一条は南方のサンディエゴの方向を向き、他の一条はパロマー山の方を向いていた。するとその物体は再び進行を続けて行って、見えなくなった。

その頃、土地保護管理局の若い局員であるトニー・ベルモントという人が、ここの地所内でト　ーラー（移動住宅車）に乗って生活していた。彼は宇宙船問題または大気中を飛ぶこのような物体などについては恐ろしいほど疑っていた。そのような物を信ずるやつは頭を検査してもらうべきだと何度も言っていた。だから彼とは円盤問題を殆ど話し合わなかった。ところが翌朝ー土曜日ー彼がやって来て、昨夜空飛ぶ円盤を見たかと尋ねるのだ。

その問題に対する相手の態度を知っていたので、何かたくらんでいるのかと私は聞き返した。

「ちがう、ジョージ。本気だよ。おれはまじめなんだ！　昨夜円盤を見たかね？」と彼は言う。

「君がそんな気持なのなら、見たと言うよ！　この家の者はみんな見たんだ」と私は答えた。

「いくつ見たのかね？」彼が続いて聞く。

「全員で百八十四かぞえたよ。だけどもっといたはずだ。最初はかぞえなかったからな」

彼の話によると、パロマー山の西側にあるパウマ谷のデンプシー農場で一団の人々が野外にすわって仕事の話をしていた時に彼はその中に加わっていたが、その全員が空中のあの現象を見たのだという。彼らは物体を二百四個かぞえた。

それ以来トニー・ベルモントは空飛ぶ円盤の信者になってしまった。しかし円盤が他の惑星から来るということには納得しかねていた。政府の実験機だったのかもしれないと彼は考えていたからである。

彼が帰ってからまもなくして、パロマー山頂の大天文台を訪問する途中の二人の科学者が入って来て、ベルモント君と同じ質問を発したので、私たちがかぞえた数を話してやった。すると相手は正確な数字を知っているかのように、私の数字は正しくないと言う。そこでベルモントが聞かせてくれた別な数字を話すと、その方が正確な数字に近いのだと言った。その時、彼らも昨夜発生した光景を観察していたことがわかったが、相手は、物体群が政府のものでない以上、どうみても惑星間飛行体としか考えられないと断言し、それ以外は洩らそうとしなかった。これによって私は奮起し、一段と不断の観測を続けたが、さほどの成果はなかった。

その後一九四九年の秋に、四人の男がパロマーガーデンズのレストランへ入って来た。その内の二人は以前に来たことがあって、空飛ぶ円盤について私と少し話し合ったことがあった。この日、時刻は正午

頃で、外は雨が降っていた—土砂降りである。彼らはランチを注文した。私たちは再び空飛ぶ円盤について語り始めた。そのなかにJ・P・マクスフィールド氏とその同僚のL・ブルーム氏がいた。二人ともサンディエゴ付近のポイントロマ海軍電子工学研究所の所員である。他の二人はパサデナにある類似の施設から来た人で、その一人は将校服を着ていた。

彼らは空間を飛ぶ不思議な物体の写真を入手したいので、私に協力してくれないかと言う。山頂の大天文台の望遠鏡よりも私が小さな望遠鏡を持っていたからである。私は山頂の望遠鏡を動かすよりもはるかに手軽に自分の機械を操作することができた。特にドームなしの六インチ鏡についてはいうまでもない。鉄砲でアヒルを狙うほど容易に狙いをつけることができた。

ドーム付十五インチ鏡はあまり役に立たなかった。宇宙船が空中をかなり速く動くので、大体にドームと望遠鏡の両方を動かす余裕がなかったからである。

彼らはこれから山頂へ行って大天文台の職員にも同じ協力を依頼するのだと言う。

それで私は、写真を撮ってくれと頼まれたあの不思議な物体が最も出現しそうな場所として、どこを選んだらよいかと聞いてみた。また惑星間飛行体の月面上における基地の有無についてもあれこれと議論した。そして最後には観測用の有効目標として月がきめられたのである。

もはや円盤が宇宙船であるという考えは私にとって空想的なものではなかった。というのは、三十年間私は哲学の教師であり学徒でもあって、宇宙の法則について常により大きな理解を求めていたし宇宙に遍満する惑星群にも、発達の程度に差はあるかもしれないが、私たちとそっくりの人間が住んでいるというのは全く筋の通ったことだと確信するようになったからである。そしてその理論と結びついた私のささやかな個人的観測によって、他の惑星群のはるかに進歩した人々ならば、惑星間航行は確実に可能の領域内にあることがわかったのである。

こうして、空間を飛ぶ不思議な物体の六インチ望遠鏡による撮影に軍部から協力を求められた時、私は勇躍これに応じたのである。

そこで私は新しいフィルムをいくらか買い込んで、私の装備すべてを彼らの要求に合致するように準備した。そしてその会合後まもなく空中を飛ぶ一個の物体のかなり上出来と思われる二枚の写真を撮ることに成功した。月を観測していた時に私は初めてそれを見たのである。

正確な日付をおぼえていないが、メキシコ市の円盤着陸事件についてラジオでニュースが放送されていた時であった。ちょうど私がカリフォルニア州ベヴァリーヒルのKMPC局から流される午後四時のニュースを出した時、ブルーム氏がそこへ入って来た。彼はラジオをとなりにして私のそばにすわり、黙って聞けと言う。ニュースが終わってからブルーム氏は奇妙な事を言った。「放送局は真相のすべてを伝えていませんね。もっといろいろな事があったのです」

それで、彼がもっと詳細を知っていることがわかったが、彼は話そうとはしなかった。二人は数分間話し合ったが、彼が出て行く直前に私は自分で撮った例の二枚の写真を渡して、それをマクスフィールド氏へ渡して検査した上で記録用にしてもらってくれと頼んだ。彼は承知した。

メキシコの円盤着陸の話はつぶされてしまった。しかし一九五一年

に私はメキシコから来た二人の官吏に会って、その事件について尋ねてみた。彼らの話では、ニュースのとおりに一機の宇宙船が着陸したのだという。それは全く真実なのだが、その事件が広がってからメキシコの民衆はひどく迷信的になり、この世の終りが近づいたといって恐怖した。そこで政府は発生した恐慌を静めるために何らかの手段をとらねばならなくなった。相手の話によると、あれは軌道をはずれて落下したアメリカのミサイルだったと政府が声明を出したというのである。それで騒ぎはおさまった。

私がブルーム氏に最初の二枚の写真を渡してしばらくしてから、一九五〇年三月二十一日にカリフォルニア州ラメサのエヴリマンズ・クラブで、私は空飛ぶ円盤に関する講演を行なった。そのとき当時の日刊紙サンディエゴ・ジャーナルのサンフォード・ジャーレルが記者として会場に来ていた。そして思いがけずも彼は私の講演を翌朝の朝刊第一面の記事として掲載した。講演に先立って彼と私は円盤問題について討論したり多くの質問を発していたのである。だが電子工学研究所では私の二枚の写真について何も言わなかったし、その後も何も公表されなかった。しかしジャーナル紙が私の講演内容を掲載したあとの二十二日に、サンディエゴのユニオン紙とトリビューン紙が私が撮影した物について尋ねてきた。

当然相手は私を窮地におとしいれたので、写真中の物体の調査を依頼するために写真を研究所へ送ったことを白状しなければならなかった。

新聞社は海軍の研究所から情報を得ようと躍起になったが、研究所の職員はそのような写真を受け取ったことはないと頑強に否定した。約一週間、各新聞社は私が研究所へ送ったと主張する写真に関する記事を掲載し続けたが、研究所は写真がとどいていないと言明するだけだった。しかし当時私はこの騒ぎを気にしなかった。ネガを持っていたからである。私はプリントだけを送ったのだ。だからのんびりしていた。新聞記者連は執拗な追求を続けて、ついには国防省へ照会した。

三月二十九日にワシントンからコープリー社のニュースサービスを通じて、空軍は写真については何も知らぬと否定し、写真を受け取ってもいないし、その事を聞いてもいないので、空軍としてはいささか懐疑的であり、空飛ぶ円盤が惑星間を飛ぶミサイルだという説には賛成できないと述べたのである。更に「そのような現象の報告すべてを空軍は受けつける・・・というのは・・・空軍は依然として〝空中現象〟の報告類を調査しているからだ」と述べ続けた。

空軍のプロジェクト・ソーサー（円盤調査計画）が中止されたといわれてから三ヵ月後に何とこのような言明をしているのである！

しかし四月四日にサンディエゴのトリビューン・サン紙は次のような記事を掲載した。

「アマチュア天文家のジョージ・アダムスキーが、宇宙船の姿が写っているかどうかについて意見を求めるために海軍電子工学研究所へ送った一枚の写真が見つかった。研究所の意見は『ノゥ！』である—それとも宇宙船なのか？」このあと長い記事が続いていた。

この後もいうまでもなく私は観測と撮影に本気で取り組んだが、もう研究所へは写真を送らなかった。そして研究所もこれ以上写真を求めてこなかった。しかし最近のものまで含めて私の円盤写真の殆どすべてが空軍の手に入っている。というのは空軍は市民に対して目撃体験を報告するようにと要請してきたからである。こうして

私は米国中の人と同じように空軍に協力しているのだが、空軍は何の回答もくれない。

とにかくそれ以来、冬でも夏でも、昼夜を問わず、寒暑や風雨、霧にもめげず、私はできるだけの時間をとって屋外に出ては宇宙機を探し求めて空を観察し、いつの日か、何かの理由で彼らの一機が近くへやって来て着陸でもしてくれればよいがと、果しない望みをいだいていた。宇宙船内のパイロットが外へ降り立って私と会ってくれれば、言語は異なるかもしれないが、互いに理解し合う方法があるだろうという気がしていたし、あの宇宙機に乗ればさぞかし興味深いことだろうとも思っていた。彼らが私をどこへつれて行こうが、地球へ送り返してくれようがくれまいが、そんなことはさほど問題ではない。とにかく彼ら自身や彼らの生き方について多くを知ることに大変な関心を持つようになっていたのである。

この数年間宇宙船を探して休みなしに観測を続けた結果、いつも空を見上げる習慣が身についてしまった。なぜなら別世界から来る宇宙船が見えるのは、まさにその大空であるからだ。

多くの友人たちも同じ習慣を身につけていた。そしてときには一人で、ときにはグループで円盤を見ている。円盤は空中にいるのであって、屋外に出るたびに空を見上げるような人は目撃できるのである—いつも目撃できるとは限らないが、早かれ遅かれ観測者は報われるだろう。当然、地方の広々とした地帯が空中観測に最適の視界を提供するけれども、円盤は大都市の上空や、米国ばかりでなく他の国々でも見られている。

しかしこの物体の写真撮影は容易な仕事ではない。いかに優秀なカメラと最高感度のフィルムを持とうとも、かんじんの円盤が飛んでくれないことにはフィルムにとらえることはおぼつかないからだ。

一九五〇年の一年間と一九五一年の春までは、絶え間ない観測に対する報いは殆どなかったし、このような物体を信じようとしない人にとってはいささか疑惑のタネとなった。この全期間中に私が撮影できたのは、わずかに遠い空中に浮かんでいる白点（複数）だけである。はっきりした形を示す写真は一枚も撮れなかった。ただし忍耐強く観測している時に無数の奇妙な閃光を見たことはあるが、地球からはるかな遠距離にあるように思われた。私の眼は物体になれてきて、日中に見た時でもそれを認めるようになった。この期間中、二百枚以上の閃光の写真を撮ったが、特にそれが月に接近していることがわかった時や、しばしば発生したのだが、月面上にいる時などに撮れたのである。

しかしこれらの写真の殆どは、かなりといえる四、五枚を除いて失敗だった。一方、これらの失敗作は、捨ててしまったとはいうものの、何かが空中を動いていることを私に納得させるのに充分であった—知的に操作されており、しかも自然界の創造物ではないのだ。

しかもそれほどの遠距離へ行けるほどの物はまだ地球で開発されていないこと—少なくとも私が目撃したほどの多数の物体が開発されてはいないことを私は知っている。このことだけでも観測に対する私の不屈の精神をうながすのに充分であったし、彼らが接近して来た時にこそすばらしい写真が撮れるにちがいないという望みを常に失わないことにしたのである。

夜ごとに私は天空を凝視しながら戸外にたたずんだ。長い冬の夜中、星々はあたたかいきらめきを放ち、風は山頂にとどろいて、急勾配を走り過ぎる貨物列車かまたは市街の鉄路を接近する路面電車

の轟音のように鳴り渡った。近くの樹木が風のためにゆれ動くにつれて、寒風が私のからだを包んで骨までしみ通るように思われた。湯気のたつ熱いコーヒーをいくら飲んでも凍てついたからだは温まらない。或る時はひどい風邪をひいて、治るまでに数週間かかったが、くじけることはなかった。円盤こそは好敵手であり、私はやめることはできなかった。

しかし風が温かくて夏の空が頭上にきらめくようなすてきな夜もあった。こずえを渡るそよ風はさまざまのメロディーをささやいて、枝で眠っている小鳥が時たま目覚めてはひとときさえずって、再びまどろみに返る。春と夏の夜にはたびたびフクロウが鳴いて夜のしじまを破ると、あちこちで別なフクロウが答えるのだった。コヨーテ（山犬）も特に満月の夜などには鋭いほえ声を放つ。すると殆ど同時に夜気は山犬たちの応答で満たされるが、コヨーテの鳴き声がやむまでは山犬たちも静まらない。

そうだ・・・神秘の円盤を求めながら観測を続けるにつれて体験した不快な夜の報いとして、魅惑的な夜もあったのだ。

一九五一年の夏と秋、それに一九五二年には、撮影に成功した写真の数に多大の満足をおぼえていた。円盤は地球に接近しているらしく、その数も増大しているように思われた。その結果、私はかなりはっきりした輪郭を示すすぐれた写真を沢山撮った。しかし細部はまだよくわからない。

昼夜をわかたず不断の観測を続けるにつれて、晴れた日よりも曇天のほうがクロースアップ写真を撮るのに好適であることがわかってきた。そして円盤の乗員は快晴ならば遠距離から思いのままに地球を観察できるけれども、霧の多い日や嵐の日などは地上に接近する必要があるのではないかと思ったりした。また時には、偶然かもしれないが、地上を飛ぶ際に雲の下に降下した。たぶん彼らは雲の密度を調査したり、当時の大気の圧力やその他の気象状況を分析していたのかもしれない。だが私にはよくわからない。

この期間中に私は五百枚ばかりの写真を撮ったが、わずかにそのなかの一ダースばかりが、これらの宇宙機が地球の飛行機とは違うことを証明するものとして保存に価するにすぎなかった。一方、円盤の数と出現頻度は米軍部の実験の範囲を超えるものがあった。

しかもこの不思議な飛行体の目撃報告は地球上の殆どあらゆる国から出たし、実験機を多国の領空に飛ばせた国はなかった。多くの理由からみてそれは公然たる事実である。

一方、もしこれらが軍部の開発になる秘密実験機ならば、私は自分の写真の版権を取ることが許されるはずはないし、公然と郵送できるはずもなかった。しかも私は一組の写真をライトパタソン空軍基地へ送ったのである。もし私が米国の秘密飛行機を撮影していたとすれば、国家の防衛という点から軍は私の撮影を中止させただろう。

地球の大気圏内外を飛んで地上の動きを観察している宇宙機の実在を確信するようになって以来、私は関心のある人すべてにこの問題を話してきた。すると、このような現象は筋道の通ったことで可能性があると信ずる少数の人が常にいたし、また多くの嘲笑者もいた。そこでその事について話してみたい。

私は一才の時からずっと米国に住んでいるが、今でも言葉になま

りがある。大学は出ていない。また、パロマーガーデンズではやらねばならぬ多くの手仕事があるので、それをやっている。人々のなかにはそのような経歴と科学的な雰囲気とを結びつけることのできない人がいるし、実際的な仕事が科学的哲学的探求の着実な基礎そのものにはならないと考える人もいる。そこでそのような人々は私を疑おうとするのだが、私は絶対にくじけることはなかった。

一九四九年に私はサービス・クラブ（軍隊の慰安所）やその他の団体等の前で講演を依頼され始めた。私はこうした招待を承諾した。彼らは他の世界から来る訪問者に関してより多くの人々に話す機会を提供してくれたからである。それ以来私はずっとこの講演を続けている。

講演旅行によって私は旅費の問題に直面するようになった。しかし殆どのサービス・クラブは講演料基金を持っていないということがわかったし、講演料を支払ってくれないのが普通だった。数名の人が五ドルか十ドルくれたし、一人、二人が二十五ドルをくれたことがあったが、この程度の謝礼で私の講演旅行の費用がカバーできた年はまだない。

しかし私は続けた。次第に数をましながら地球の大気圏内を飛んでいるあの宇宙船について人々に話してやらねばならないと思ったからである。

すぐれた写真を撮り始めるにつれて私はそれらを引き伸ばしてもらい、講演の資料として使用した。それらは眼で確認することができたし、地球の飛行機とは別な飛行体が実在するのだという私の説の生きた証拠となった。

人々の半分も私の話を信じなかったが、講演はその目的を果たしつつあった。それによって人々は宇宙機について語ったり考えたりするようになったからだ。しかも以前にもまして人々は大空を見上げるようになった。それで私は講演を続けたのである。

フェイト誌に出た記事によって私は経済的に助かった。またその記事は、もし掲載されなかったら円盤に興味を持つようにならなかったかもしれない多くの人々の眼にふれた。一九五一年七月に載ったその記事で私のことを初めて知った人々から、私は今でも手紙を受け取っている。

人々は私が撮った写真のプリントを望んだので、それにかたちだけの値段をつけた。これは円盤を撮影したりその実在を証明したりするのに要した相当な出費を埋め合わせるために、少なくとも円盤に助けてもらわねばならない最初の機会であった。ところが、写真の〝商品化〟のゆえに私は非難されたのである。

円盤のようなものを殆ど考えたことのない一般人にとって、一人の男が出かけて行って別な世界から来た宇宙船を撮影できるということが信じがたいことは私にわかっている。

「あいつは人々をだましているにちがいない！　そんな事があるわけがない！」

しかし私が撮ったネガは信頼できる人たちの検査用にいつも貸し出したし、しばしば検査されてきた。検査の結果は例外なしに写真の真実性を立証した。仕上げをやってくれる写真屋はカリフォルニア州のパロマーガーデンズから四十マイルばかりのカールスバッドに住むD・J・デットワイラー氏である。氏はいつでも質問に応じてくれる。

それでもあらゆる種類の悪口が私に返ってきた。科学者その他の

人々からである。どうやら私の写真が真実なものであることを人々に信じさせようとするのは出過ぎたことらしい。一種類以上の写真の後景についた複製のキズがよく指摘されて、重ね焼きをしたということになったらしい。結局私はこれらの写真を〝でっちあげた〟ということになった。

一体、私がそんなことをするだろうか？　でっちあげるとすれば何かの理由がなければならないのだ！

ともかくこれによってわれわれのレストランの仕事はふえて、多数の関心ある客を引き寄せることになった。この商売の繁盛を目的としたことならば、いっそ正当なレストラン宣伝と促進活動に時間と金のすべてをつぎ込む方がはるかに賢明なやり方だという悪口が流れたが、私の所へ来る客はそんな事を論じたりしなかった。

この悪口は古い考え方から抜けきれない人々が持ち出す懐疑論の一例である。円盤の目撃は世界中から報告されているし、私以外の他の人が撮影した円盤写真もしばしば新聞に掲載されているのに、この有様なのだ。

七百回以上に及ぶ撮影の試みのなかからすぐれた写真は十八枚しか撮れなかったと私がなにげなしに話したら、「アダムスキーは七百枚以上も円盤写真を撮ったと称している。他人ならば一枚撮れればいいところなのに、なぜアダムスキーはそんなに多くの写真が撮れるのか？」という噂が広まった。これは曲解の例である。

しかし私が空前かつ想像を絶するような物事を扱っているという事実を考えるならば、このような誤解が起こるのも無理からぬことである。これは一般に先駆者にとって当然の運命なのだ。

円盤を撮影したのは私一人どころではないのに、このような試み（撮影）に際して私と同じほどの多くの時間、労力、金を費した人が他にいるかどうかは疑わしいという人がいる。しかし他の円盤写真の殆どは飛行中か、またはいわば偶然に撮られたものである。

パロマー山は円盤着陸用としてはたしかにすばらしい場所である。パロマーガーデンズはこの美しい山の海抜三千フィートの南側斜面に位置するけれども、あらゆる方向をはっきりながめることができる。沢山の峰々が東方や南方にそびえ、山々や谷を越えた南西の彼方には太平洋が大きく展開し、沿岸地帯に霧やモヤがない時は望遠鏡や双眼鏡の助けをかりなくても海がくっきりと視界に入ってくる。私が過去二年間に宇宙機の殆どを見たのは、この山々や沿岸の上空である。しかしこれには或る確実な理由があるのだ。この事実を調査したい人は自分でやってみるとよい。

もしこれらの宇宙機が自然の磁気力に乗って飛んでいるとすれば—私はそのように信ずるものだが—、そしてもし地球の〝渦巻き〟が円盤にとって自然の再充電になるとするならば、私が住んでいる地帯は円盤の進路にあたるのである。これはちょうど地球の飛行機が空港間に一定の航路を持っているのと同様である。というのは、カリフォルニア州カレクシコには強烈な自然渦動があるし、カリフォルニア沿岸ぞいのサンタモニカ湾にも別な渦動がある。この二個所を線でつないでみると、パロマー山の南側の山々が殆どこの線のまん中にくることがわかる。

この事実と私の間断なき観測とを考えてみると、私が他の人よりも多くの宇宙機を見たとしても不思議ではない。だがこのパロマーガーデンズには他にも宇宙からの訪問者に興味を持ち、私と行動を共にして、毎週定期的に多くの時間を観測に費している人たちがい

もし私が金のためにこんな事をやっていたとするならば、新聞の第一面に私のことが掲載された時に大変なもうけをやったことだろう。なぜなら私は円盤問題を論じることによって知れ渡った最初の人々の一人であるからだ。しかし私はそのような深遠な問題を金のためによごしたくはなかったし、これほどの空前の出来事をなぶりものにしたくもなかった。これが円盤をバカにしている或る人々によって私が攻撃目標にされてきた理由と考えられるのである。

更につけ加えると、円盤問題全体にかかっている疑惑について言えば、この現象の研究者すべては極度に混乱が存在することを知っているし、この混乱の多くが大衆の好奇心を減じさせるためにわざと起こされていることも知っているのだ。

国家の防衛には多くの面があり、しかも当局自体が宇宙と反重力の方向に促進活動を行なっているのである。また彼らは敵がいることも知っている。（注＝ソ連を意味する）しかるにこの新しい形式のパワーや推進力の一般的分野に敵がどれくらい食い込んでいるかがわかっていないのだ。また彼らは第二次大戦が終わった時に、知識を持つドイツ人科学者のすべてが米国へ来たわけではないこともよく知っている。これに加うるに、大気圏外から来る物体の神秘をだれも解明していないということになれば、ライトパタソン空軍基地や国防省は考慮すべき事態にあることがわかるだろう。特に〝火星人襲来〟の大失敗作を書いたオーソン・ウェルズ（注＝むかしの米国の作家。この作品のラジオ放送により真実の事件と感違いした一般人のあいだに騒動が起こったことがある）が一般人の心を即座に大きく動かしたことを思い起こせばなおさらである。

以上の他に、普通はひそかに論じられているのだが、別な観点がある。それはもしこの世界が円盤のパワー源を発見したとすれば、この文明の運営の基になっている経済機構全体に何が起こるかという問題である。地球人が現在右の知識を獲得しつつあるという明白な証拠がすでに存在すると主張する人もいる。またなかには、そうなる以前に必死になって戦う業者がいると言う人もある。

以上の事柄を考えてみると、私を疑おうとする人々に味方をするほうが容易であったのだ。円盤研究家のすべては空軍のほう大な資料が公開される時を期待している。それまではアマチュアは自分の洞察力を利用するより他に仕方がない。そのような人は目撃体験などを発表する人の動機や正直さが含まれていると自分で信ずる物事に調和して判断をしなければならない。

私が詳細を述べるのに徹底的に率直であろうとしたのは以上の理由によるのである。私には隠す事は何もないし、陰険な動機もない。私は自分の体験の実際的な面に関して尋ねられるかもしれない質問のすべてを網羅するように努めてきた。

われわれの考え方に別な次元を加えるような問題によって、広大な新しい科学的哲学的な考え方が頭をもたげることは容易に察することができる。これらの考え方のなかには驚くべきものがあり、当然古い基礎をゆさぶるだろう。私は厳密に現実の事実に固執しているので、目下はそのような新しい考え方を持ち出すことはしない。しかしこうした考え方に関する私自身の説は持っている。そうだ、私自身の深遠な、充分に吟味された確信があるのだが、これは将来別な書物で述べることにしよう。

一九五一年から一九五二年にかけて私はパロマー山からほど遠からぬ各地の砂漠地帯に円盤が着陸したらしいという報告を受け取り始めた。私はこれまでに如何なる団体にも属さないでただ一人でやってきた。それで、個人的なコンタクト（宇宙人との会見）を望みながら、そして宇宙人がどのような人間であるのか、地球へ来る彼らの目的が何であるのか等を知りたいと思いながら、これはと思う地点へ多くの旅をした。しかしまだ成功していない。

だが〝成功の秘訣は目的を変えないことである〟という諺がある。そしてそのとおり私の長い観測が報われることになった日がついに来たのである。

（第一章終り。以下次号）

昭和45年度日本ＧＡＰ総会、開催

盛況裏に終了！

去る十一月八日、豊島振興会館において昭和四十五年度日本ＧＡＰ総会が開催された。この日は朝から菊薫るころを思わせる秋晴れの良い天気であり、日本ＧＡＰの将来を暗示しているかの様でもあった。この日の参会者は八十数名、遠くは中国、四国、関西地方からの列席者もあり、会はなごやかなうちにも真剣さを帯びて午前十時韮沢潤一郎司会のもとに始まった。

まず久保田代表が「ＵＦＯと宇宙哲学」と題して講演。戦後始めてアダムスキーの著書にふれたことから始まり、小学校時代の円盤目撃、ア氏存命中に見も知らぬ代表にあたかもわが子同様に資料等を送り続けてくれたことなど、代表御自身の体験談をまじえての講演は聞く者に多大の感銘を与えた。そしてお話の最後に「今後もやり続ける」という宣言は岩をも砕き万難をも排す力強さが感じられた。

続いて斎藤雄久氏が「円盤撮影の体験」と題し、富士山上空の円盤をカラー8ミリに撮影するに到ったいきさつについて講演。斎藤氏の円盤目撃件数は五十数回に及び、つい先日も池袋西武デパート屋上で円盤を白黒16ミリに撮影するという幸運にも恵まれた。斎藤氏が円盤を写真に撮影したり目撃したりする時はその前に胸さわぎ等なんらかの衝動が起こるそうである。しかしブラザーズは公平であり、だれでも忍耐強く観測を続けるならば、必ず円盤を目撃することができるということを強調された。この日も総会に来る途中電車の窓から、澄みきった秋空に銀白色に輝きながら滞空する母船を見たという。宇宙とのつながりを身近に感じさせられる思いがした。

久保田代表、斎藤雄久氏の素晴しい講演によって午前の部は終了。昼食の休憩となった。

今回の総会の特徴は視聴覚資料に重点をおいていることであり、ＧＡＰ製作のスライド「ＵＦＯとＧＡＰ」によって午後の部は始まった。これはアダムスキーをはじめ世界円盤研究界の姿及び日本ＧＡＰの歩みまで網羅した素晴しいものであり、美しい音楽に乗って流れる代表御自身の解説は、さながら天上からの呼びかけの言葉のようであった。

会はますます熱気を帯びてきて、スライドに続いてアメリカ文化センター提供のカラー16ミリ映画「アポロ11、12号」が上映された。そして今回の最大の呼び物、本邦唯一の記録映画であり世界的にも貴重な富士山上空円盤実写映画が中映されるに到って雰囲気は絶頂に達した。美しい銀白色の円盤が西日のあたる半透明の雲を出たり入ったりするのは全く壮観である。同じく斎藤氏の西武デパートにおいて撮影の16ミリ円盤フィルムも上映された。

そのあと記念撮影が行なわれ、久保田代表、清家新一氏を交えての座談会となる。菓子をつまみながらお茶で喉をうるおして、なごやかなうちにも熱気を帯びて、聖書と宇宙哲学、円盤の推進方法等さかんに質問がとぶ。特に超心理研究家として有名な橋本健工博が熱心に質問を出されたのが印象的であった。そのうち定刻の四時三十分がきて、代表から閉会の辞が述べられ、名残りおしくも盛況裏に昭和四十五年度日本ＧＡＰ総会は幕を閉じた。遠路はるばる御出席くださいました日本ＧＡＰ大阪支部長の市川宏氏をはじめ、総会に御参加くださいました皆々様に厚く御礼を申し上げます。

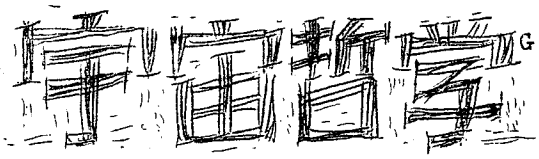
（中山正史記）

＜写真＞　左頁小判は左上から受付風景。久保田代表の講演。斎藤雄久氏講演。右上から、つめかけた参会者。討論会（中央は清家新一氏）。橋本健工博の公開質問（左方に立っている人）。上段の記念写真は前列向かって左より五人目、韮沢司会者、七人目安斎会場責任者、以下右に、市川大阪支部代表、久保田代表、斎藤雄久氏。清家新一氏の順。

THE 1970 IGAP-JAPAN SYMPOSIUM ON COSMIC
PHILOSOPHY & SCIENCE OF GEORGE ADAMSKI
昭和45年度日本GAP総会
THE 1970 IGAP-JAPAN SYMPOSIUM ON CO
PHILOSOPHY & SCIENCE OF GEORGE ADA
昭和45年度日本GAP総

出た！

たま出版発行



G・アダムスキー著
久保田八郎訳
B6・107頁
¥350 〒45

待望久しき改訂版がついに出た！ アダムスキー哲学の中心をなす一大金字塔 精神科学研究家の必携の書 訳文は徹底的に改訂 本格的オフセット印刷 ぜひ座右にそなえられたい 日本GAPでは取扱わないので御注文は必ず出版元へ

一隔月刊誌一 た ま

¥135（送料共）年間¥720

21世紀文明のあり方を目指して物心両面から人間の生き方を追求し、宇宙意識への旗印を掲げて進むパイオニア一誌。特に第13号より久保田八郎の〝宇宙意識開発講座〟が連載され好評を博している。

東京都新宿区納戸町33
西応ビル
たま出版
振替東京 94804

G・アダムスキー2大名著刊行中！

（1）テレパシー

（2）生命の科学

いずれもアダムスキーが異星のブラザーズから伝えられた人間の宇宙的生き方を詳説した現代の聖書。（1）では人間の超感知力開発の方法を説き、（2）では幸福な生活の実現法を説く。注文は必ず直接出版元へ。

(1)¥290 〒55 (2)¥420 〒75

東京都文京区白山1—29—12 日本税経ビル
文久書林 振替東京2521

日本GAP機関誌
ニューズレター旧号

下記各号在庫あり。ご注文は日本GAP本部へ。送料は本部負担。送金は切手代用にてOK。但し高額切手は不可。

35号 ¥130
36号 ¥150
37号 ¥150
42号 ¥200
43号 ¥200

無料贈呈！

GAPの宮内温夫君画集が若干ある。希望者は切手35円を添えて申込まれよ。

東京月例研究会会場変更

日本GAPは昭和四十五年十二月度より月例研究会の会場を従来の豊島振興会館からその右隣りにある豊島区民センターに変更した。新会場は近代的な建物で最新式設備を持つ快適な場所。冷暖房完備。ふるって参加されたい。

◎当日会費 一五〇円

◎日 時 毎月第一日曜日 午後一時—五時。

注意！ 但し四六年一月のみは第二日曜の十日に行なうから了解されたい。当日は会終了後、別な場所で非公式に新年宴会を行なう。会費・会場未定。

◎テキスト 一月のみは「死と空間を超えて」二月よりは「宇宙哲学」を使用。

◎道 順 国電池袋駅下車、三越デパートの横から奥へ行けばよい。

編集後記

◎年末も押し迫ってあわただしいこの頃、独り静かに座して宇宙を想うというのはノンキそうに見えながら実は最重要な心的態度であろうと思われます。騒然たる世情のなかにあって泰然自若たるには宇宙的意識を持続することが絶対的条件であることを更めて痛感する次第です。

◎フレッド・ステックリングの「なぜ彼らは来るのか」も回を重ねること三回。次号からはいよいよ「宇宙人との対話」の章に入り、著者のコンタクト実話が展開します。

◎本号よりアダムスキーの「空飛ぶ円盤実見記」新訳を連載することにしました。高文社刊「空飛ぶ円盤実見記」と比較して読まれればかなりの相違があることに気づかれるでしょう。しかし訳者の高橋豊氏には限りない敬意を表します。今回の新訳にあたり、再度原文を精読してその内容の真実性と重大さを更めて認識した次第です。全篇に原著者の誠意が溢れています。次号には第二章「記念すべき十一月二十日」を掲載。例の砂漠における有名な金星人との最初のコンタクト事件を正確な訳文によってお伝えします。ご期待下さい。

◎「アダムスキーを原書で読もう」運動を提唱します。英語というのは日本人にとって最も困難な外国語の一つですが、明治以来日本の学生は英語学習というきずなから逃れられない運命にあり、塗炭の苦しみをなめています。しかしUFOに関心のある学生会員諸君にはアダムスキーの原書が絶好の教材になりますから、これでもって英語に親密感を持つことをおすすめします。さしあたって「実見記」を入手するとよいでしょう。入手法は編者宛ご照会下さい（返信用切手15円を添付のこと）

◎来年度は英文版機関誌の本格的なものを刊行する企画もあります。これは主として海外向けの情報誌ですが、国内の希望者にも頒布の予定で、詳細は追って発表します。

◎八重要なる告知V東京、西浅草の会員堀川とき様より十万円の御寄付にあずかりました。厚く御礼を申し上げます。この寄金により熟慮の結果、リボン打ち装置付二〇段ピッチの最新式日経和文タイプライターOMD335型新品を購入しました。新鋭機のため従来の古い機械に比して疲労度が低いはずですから、次号からはこれを編者みずから駆使してオフセットの版下を製作し、写真オフ印刷の本格的な機関誌にしたいと考えております。ただし従来よりも印刷コストが少々高目になりますので会費御納入を確実にお願い致したく、寄付金は喜んで有難くお受け致しますから、よろしく御支援の程をお願い申し上げます。回想すれば最初のタイプライターは七、八年前に福島市の佐藤テル様より御寄贈をいただいて長く愛用しましたが、東京移転の輸送に際してダメになり、困っていたところを西浅草の日経事務機社長金森氏から同型の機械の御寄贈を受けて救われ急場をしのぐことができましたものの、この機械も少々駄々をこねるようになって再び困っていたところへ思いがけず堀川様より三台目を頂戴して大助かりしたという次第です。今度のはプロ用版下専用機ですから当分これで大丈夫でしょう。まことに人間の親切さほど尊く美しいものはないということを痛感するとともに、そのような思想を伝えることによって人間の心に確実に影響を与えているアダムスキーの偉大さを再認識する次第です。

◎例によって年賀状は一切出しません。良き年をお迎えになりますようお祈り致します。（久）

コズミック・ニューズレター 第44号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
東京都江戸川区篠崎六―二三一
電話 （六七九）五三八六
振替 東京三五九一二
（久保田八郎個人名義）
頒価二〇〇円・送料三五円
昭和45年12月15日発行

禁無断転載（不定期刊）